
旅人なる赤龍帝の兄

アザトク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人なる赤龍帝の兄

【Nコード】

N0154R

【作者名】

アザトク

【あらすじ】

もしも一誠に最強の兄貴が居たら？ って感じのお話です。一話目から原作介入ですが随分と遅いところから始めます。気に入らなかったら見なくても結構です…グスン

プロローグ（前書き）

俺は諦めねえ！！

プロローグ

ちゃっす、俺の名前は兵藤旅人^{ひょうとうりょじん}っす。

俺は今から旅に出る為に家を出ようとしている。

「本当に行くのか？」

「ああ、親父すまねえな。こればかりは俺の決めた道だ、貫き通すぜ」

見送るために家の前まで来てくれたのは親父に御袋に一誠だった。

「寂しくなるねえ、元気でやりなよ」

「当然だ、御袋も元気でいてくれよ」

「兄貴・・・」

「一誠も自分が好きなもんにはどんなものであれ本気でいけよ」

「もちろんだ、夢を諦めねえ」

良い返事だ、俺は二カッと笑い背を向ける。

「あばよ！ またいつか帰ってくるぜ！！」

こうして俺は家を飛び出した。

プロローグ（後書き）

やるならとことんやろう

出会い、再開（前書き）

四か月ぶりの更新、これはいかんど

出会い、再開

三人称 side

なにもない空間、そこには一人の少年と赤くてデカイ竜が居た。

少年の体はいたるところから血を流しており、満身創痍の状態

一方で赤い竜も強固な鱗で守られた体のいたるところから血を流して満身創痍

「小さき者よ、このような楽しき戦いは久しぶりであったぞ」

赤い竜は自身をここまで痛めつけた人間に対して心からの敬意を送った。

「はっ、そうかい。こっちも久しぶりだったぜここまでの戦いは…
…それと俺の名は兵藤旅人だ。覚えとけ」

「ふむ、良い名だ。その名前、覚えておこう」

実に一週間、この“次元の狭間”と呼ばれる場所で戦った両雄の間には種族を超えた絆のようなものが生まれていた。

「今から次元の裂け目を開く、そこから元の世界に帰れ」

「恩に着る」

ボロボロになりながら裂け目へと向かう旅人

「あばよ宿敵（親友）、次こそは決着をつける」

「ああ、去らばだ宿敵（親友）、次に出会うまで生きていろよ」

「デメエもな」

背を向けながら手を振り、旅人は裂け目へと姿を消した。

side out

??? side

なにやら目玉が沢山の空間を抜けると、そこはどこかの学校の屋上だった。

「ここは………駒王学園？」

ははは、最高の場所に送ってくれたようだなグレートレッド

久しぶりに一誠に会いに行くか、親父とお袋も元気にしてるかな？

俺はお土産のことを考えながら帰ろうとすると、学園全体に結界が張られていることに気が付いた。

結界とか、北欧あの爺さんの部下だっていう美人な女性ばかりの戦闘部隊以来じゃないか。

で、そんな結界がなんでこんなところで？

そう思って俺は轟音がしている校庭を見下ろしてみると赤い鎧と白い鎧を着ている二人が戦っていた。

見たところ決闘みたいだし手は出さなくても良いか。

それにしても————

「あの二人、遅いな」

レベルが低いってわけじゃないが、動きが遅い

あれぐらいの速さだったら、北欧の爺さんと闘ったら即殺されるぜ？

考えたらあの爺さん、何者だったんだろうか？

キャバクラで出会って、そのあと酒を飲んでたら、美人さん達に『今度はお前が連れ出したのか！』とか言われて、なんとか逃げ切ったんだが……

「いかにいかに、若干トラウマものになってる」

危ない、本当に怖かったぜあいつらは。

それと、下の赤い方

なんか凄い『部長のおっぱいがあああ！』とか『子猫ちゃんのおっぱい』とか叫んで白い方を殴ってる。

白い方は白い方で『我、目覚めるは、覇の理に——』とか言うてるし

あれか？　これってなんか最終決戦みたいな感じなのか？

白い方が良い感じのオーラを出し始めると、突然、サルが現れた。

どうやら白い方を迎えに来たらしい。

はあ、なんだよ、最終決戦じゃないのかよ。

若干、がっかりして俺が空を見上げると変な男がドデカイ光の球を作っていた。

「はあはあはあ、ヴァーリーめ、よくも同胞を」

ふむふむ、なにやら面倒くさそうなやつぱいし俺が倒すか。

俺はその男の目の前まで跳躍し、踵落しを食らわせてやった。

side out

リアスside

私達はイッサーとヴァーリーの戦いが終わって、アザゼルと一緒にイッサーの傍までやって来た。

すると――――

ドッゴオオオオオオオオオオオン！

私達とヴァーリーの間になにかが落ちてきた。

「な、なんだ、一体!？」

「くっ、敵の援軍か!？」

上がイッセー、下がヴァーリー、どうやら向こうも予期していない事態だったみたいね。

「イイイイイイイヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオイ!!」

それに続いて、なにかが着地してきた。

着地した場所は地面が盛り上がり、土煙が舞う

私達は構える。

土煙が張れていくと血を流しボロボロになった、誰かに面影が似ている一人の少年が現れた。

「ケホケホ、いやゝ、考えなしに跳んだけど、案外屋上から飛び下りても無事だったな」

ケラケラと笑う男

誰、一体!!

「……あ、あああ」

イッセーが震えながら男を指さす

敵も味方もそんなイッセーに注目している。

「あああ、兄貴!？」

『え?』

一瞬の静寂、そして

『兄貴iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!?』

え? この人が噂のあの人!?

「うお!? え、なに?」

大声にビックリした男がこちらを向く

「おお、なんだ一誠じゃないか、赤い鎧ってお前だったのか」

「なんだじゃないよ、なんでここにいるのさ!?!?」

そう言うと、イッセーのお兄様は少し悩んで

「ちょっと竜と闘ったらここに送られた」

『はい?』

竜? それってドラゴンのこと?

「いやゝ、強かったなアイツ」

ははは、と笑うイッセーのお兄様

「貴様、何者だ？」

「ん、なんだ白いの？」

ヴァーリーが警戒心バリバリで聞く

「俺か？ 俺の名は兵藤旅人、しがない旅人さ」

「そうか、では目障りだ、死ね」

てっきり撤退するものだと思っていたヴァーリーがイッセーのお兄様に攻撃を仕掛ける。

私達は突然のことに反応できなかった。

『Divide!』

しかも力も半減されてしまった。

敵味方関係なくこの場に居る全員がイッセーのお兄様の死を覚悟したわ。

でも――――

「遅いんだよ、雑魚が」

手首を返すだけの裏拳、それが突撃してきたヴァーリーに当たり

それだけで『禁手』した白龍皇のヴァーリーが吹き飛び、校舎を突き破っていった。

ヴァーリーは校舎の向こう側で仰向けに倒れ痙攣している。

「その猿、あいつの仲間だろう？ 連れて帰れや」

「は、はい！」

そう言って、イツセーのお兄様は背伸びをして

「じゃあ俺、先に家に帰ってるから」

「え、ちょっと待ってくれよ兄貴！」

「じゃなく、お土産は期待するなよ」

手を振りながら帰ってしまった。

あれ？

side out

出会い、再開（後書き）

ちゃんとこれからは更新しなきゃな。

冥界出発前（前書き）

サブタイトル通り、一誠たちが冥界に行く少し前のお話です。

冥界出発前

家に帰り、親父とお袋との久々の再開で泣きながら抱きつかれたりした。

俺は旅先での話をしたり、逆に最近の話をしてもらった。

なんでも俺達の家ホームステイしに来ている奴が何人か居て、家族同然に過ごしているとか。

家族か……楽しみだ。

「ただいま」

「おう、お帰り」

ようやく帰って来た一誠

その後ろにはさっき見かけた紅髪の美女と金髪の少女がいた。

「しばらく見ないうちに両手に華を作っているとは……我が弟ながら恐ろしいな」

「いきなり何言ってるんだよ？」

なんか一誠が遠くにいる感じがするよ。

「あ、どうも初めまして、イツセーさんのお兄さんですよね！」

金髪の娘が丁寧に関頭を下げてくる。

「ああ、これは挨拶が遅れてごめんね。俺は兵藤旅人、その一誠の兄貴だ、好きに呼んでくれ」

「私はアーシアって言います！」

「私の名はリアス・グレモリーと言いますわ、気軽にリアスと呼んでください」

互に関握手する俺とリアス

「ははは、リアス。俺はお前と同じ年だから敬語なんて使わなくて良いよ、アーシアちゃんもここに住んでるなら俺に敬語を使わなくても良いよ」

「そう？　じゃあそうするわ」

「私はいつもこの喋り方なんで気にしないで下さい」

ふう、なんとか壁を作らずに話せてるな。

「兄貴、戻ってきてるなら連絡してくれよ」

「ははは、スマンスマン。サプライズで驚かしたかったんだ」

本当はまともなお土産が無かったから期待されても困るだけだったからなんだけどね。

まあ、とにかく

「みんな、元気そうでなによりだ」

心配してたところも幾つかあったが安心したぜ

それから数日、夏休みに入り、朱野とゼノヴィアというこれまた美人が居候しにきた。

その際に朱野が一誠に抱きついてリアスとアーシアが色々と抗議していたのを見て一誠ハーレムのメンバーが増えたのを確認した……弟よ、ちよいと男同士、拳で語り合おうか。冗談はさておき、俺は夏休み明けから駆王学園に清掃員として働くことを考えている。

なにやら俺の感があの学園は楽しそうなことが起きそうだと言っているからだ。

だが、そんなことよりも重要なことがある

「……………家、デカくなりすぎじゃね？」

昨日、近所の皆様方はどこかもっと良い土地が見つかったからと言って一気に引越してしまい

朝、起きたら我が家がこうなっていた。

『や、なんじゃこりやああああああ！？』

一誠の叫び声が聴こえてきた

うん、叫びたくなる気持ちわかるよ

朝食時、親父とお袋はなぜか一日でリフォームできたことに疑問を持っていなかった

俺もなんとなく二人に合わせておく。

ふむ……今回の現象、人間の力以外が関わってるな。

それこそ魔法や超能力とかが

前に旅先でそういう類の力を操る奴らにあったが、そいつらも普通の人間にはできないことを平然とやってのけてたな。

朝食が終わって一誠の部屋で皆が集まってなにやら話している間、暇なので俺はのんびりとTVを見ている。

そして話が終わったらしく、みんなが戻ってきた。

各自思い思いのことをしている中、座布団の上で胡坐で座る俺の膝の上に子猫が乗ってきた。

俺の妹分第一号である子猫は俺が居る時はここが定位置になっている。

なんか知らんが懐かれた。

もちろん恋人的な意味ではなく、甘えられる兄貴分としてだが。

ちなみに妹分第二号がアーシアで第三号がゼノヴィア

唯一の弟分が木場

みんな俺のことを兄と呼んでくれる。

……なぜだ？

リアスと朱野は兄とは呼ばないが、家族として接してくれる。

だけでも俺は勘付いている、こいつら俺や親父達に言えない隠し事をしていると

それが犯罪やドラッグでなければ良いんだが、そうだったらどうしようと思ってもいる。

とりあえず俺の胸に寄りかかってきている子猫の頭を撫でておく。

ゴロゴロと気持ちよさそうに喉を鳴らす子猫

うんうん、可愛いな

「なんか子猫ちゃんは兄貴に随分となついてるよな」

「人が良い気分になってるんですから黙っていてください」

一誠には厳しい子猫である

「こら、そんなに冷たくすることないだろうが」

「……すみませんでした」

そう言いながら俺の腕の中で丸まり、寝息を立て始める子猫
寝るのかよ、完全に逃げたな。

「あ、そうだ父さんと母さん、それに兄貴」

「なんだい、イッセー？」

「俺達、夏休みの間さ、部長の故郷に行くから」

リアスの故郷……確か外国だって話だが、本当かどうか。

案外、こいつら悪魔とかの類で冥界とかじゃないかな？

な訳がないか！

グレートレッドの野郎が居たからって考えすぎだよな。

俺ってばなにを言ってるんだか、ドラゴンは数匹合ってるけども悪魔は見たことないし

そんなやつが家に関わるだなんて……この家のリフォームのことがあったや。

いやいやいや、忘れようこのことは

「俺も行きたいな」

「駄目」

「どげなして？」

「なんとなく」

「よろしい、ならば戦争だ」

「ちよ、兄貴の拳骨は軽く死ぬるからね？ 喧嘩なんてする気は…
ギャアアアアアアアアアア！！」

一誠をボコリスツキリしたことだし

「じゃあ、俺は行かないからお土産よろしくな」

「……………」

「返事がない、ただのサンドバックのようだ」

「違うから！ 死んでないし、サンドバックでもないからね！？」

ふう、やっと起きたか。

とにかく、俺はソファに座り、膝上に子猫を置いてまた考え始めるのだった。

下手したら、俺の予想以上に兵藤家の周囲の状況は裏側で大きく変動しているのかもしれない。

冥界出発前（後書き）

さてと……早速話に詰まったぞ？

冥界到着（前書き）

今回は冥界でのお話です。

オリキャラが少しだけでできます。

主人公についてのツツコミはドンと来い！！

冥界到着

一誠達がリアスの故郷に行く五日前

俺は家を探索していた。

五階には俺の部屋があり四階は誰も使っていない。

だから何もないはずなのだがアザゼルをこの階で良く見かける

アザゼルは教師なのになんで家に来ているか不思議だが本人曰く『オカルト部の活動だから』らしい

まあ、顧問なんだし見に来るのは当たり前か

あと、アザゼルとはよく話が合うので仲はかなり良い

「しかしまあ、見事に何もないな」

全ての部屋を探ってみたがなんにも無かった。

肩を落として最後の部屋を出ようとした時、ドアの近くに六茫星が書いてあるシールを見つけた

気になり手に取るといきなりシールが光出した

「うお！　なんだよ一体!？」

部屋を満たす光

光が収まり目を開くと森だった

「……………冒険の匂いがするぜ」

どうしてこうなったかは分からないが冒険の匂いがしたならやることは一つ

俺は足下に落ちていた木の枝を拾って地面に立てる

手を離すと俺の方に倒れた

「よし、向こうだな」

さあ、冒険の始まりだ!!

一誠side

「どうしたんだよ子猫ちゃん？」

俺の部屋に集合したオカルト部の面々

その中で子猫ちゃんがずっとモジモジしていた

「いえ、座り心地が悪いというかなんというか」

「あ、わかります。なんか落ち着かないんですよね」

子猫ちゃんの言葉に同意するアーシア

「あれじゃないかな、いつも兄さんの膝の上に座ってるから」

なるほどゼノヴィアの言う通りだ

子猫ちゃんとアーシアとゼノヴィアは——特に子猫ちゃんは——よく兄貴の膝の上に座る

「あそこの座り心地は凄いですよね」

「尋常じゃなく落ち着く」

「なぜか知らないけどな」

兄貴の妹分達から好評の兄貴の膝

なんか兄貴が羨ましいぜ

「ねえ、イツセー」

「なんすか部長？」

「ずっと気になっていたんだけどイツセーのお兄様って何者？」

「あ、私もそれは気になってましたわ」

「色々噂は聞いてるんだけどね」

気がつけばこの部屋にいる全員の視線が俺に集まっていた

「うーん、そうだな……」

兄貴が何者って言われても俺の兄貴でしかないんだけども

「一言で言うなら旅人だな」

うん、これしかない

「旅人ねえ……私が聞いた噂からイメージすると英雄とかなんだけど」

「私が聞いた噂から想像するに霸王ですわね」

「僕が聞いた噂では修羅なんだけど」

上から部長、朱乃さん、木場

ああ、そのイメージもわかる気がしなくもない

「多分、それは兄貴がヤンチャしまくってた時期の話ですよ」

「え？ お兄さんがヤンチャな時期ですか？」

「うん、大々三年ぐらい前の話かな——」

兄貴は自由が好きな男でやりたいと思ったことはなんでもかんでもやってた。

で、兄貴は喧嘩が半端なく強くてここら辺一帯の不良が束になって

も敵わないぐらいだからだった

とある日、兄貴が夜の街を徘徊してたら誘拐されちゃって奴隷扱いされたらしい

それから二ヶ月後、奴隷仲間と反乱を成功させて新しい国を作りあげたんだ

『……………』

俺が話終わると沈黙が場を支配した。

「ツツコミ所が多すぎるわ」

「分かってますよ部長、でも全部事実だし、まだまだ他にも武勇伝は山ほどありますよ？」

そういや今朝から兄貴の姿を見てないけどなにしてるのかな？

S i d e o u t

「なるほど、事情は把握した」

俺はあの後、なんとか人里に辿り着くことができた

家や建物関係は全て木造、村長の話によるとこの世界で田舎の方らしい

村人は畑仕事なので採れた物を売って生計を建てているらしい。

一宿一飯の恩で俺は畑仕事を手伝っていたのだが仕事の途中で偉そうなやつらがやって来た

なんでもここら辺を仕切っている奴らで圧政をしており、子の村も被害にあっているらしい

「貴方達には一宿一飯の恩がある、暴力的になるが任せてくれ」

「御待ちなされ旅人殿、一体なにをする気じゃ？」

「ここら辺を仕切ってるのかいう奴——グラシヤラボラス家をぶっ潰す」

俺がそう言っていると村長や他の村人達が制止の声を掛けて来る

「お止めなされ、一宿一飯の恩なら十分に返していただいた」

「そうだぜ！ あんたが気にすることじゃないよ！！」

だが俺は無視をして村長の家を出て行こうとする

「待って！！」

目の前に両手を上げて立ち塞がる少女

名前はニーナ、俺を家に泊めてくれた家族の次女だ

「行かないでよ、行ったら旅人が死んじゃうよ！！」

泣きながら俺に訴えかけるニーナ

その頭に手を乗せて、横を通り過ぎて行く俺

「……………決意は固いようだね」

扉を出たところで話しかけてきたのは、村長の家の壁に寄りかかって行ったニーナの姉であるアイラ

アイラはこの村で唯一、機械やバイク系統を扱う仕事をしている。

「私の改造したモンスターバイクがあるからそれで行きな」

「止めないのか？」

「三日ほどアンタと一緒に暮らせれば止めても無駄なことぐらい分かってるさ、なら私はあんたの旅立ちを邪魔するわけにはいかないよ」

「……………そうか」

ふふふ、アイラには敵わんな。

「本当に佳い女だよ、お前は」

「ははは、ありがとうね。——じゃあ、行ってらっしゃい。生きなよ」

「ああ、行ってきます。またいつか会おうな」

拳と拳を合わせて俺はバイクに跨り出発する。

去って行く、旅人の背中を眺めながらアイラは呟いた

「本当、馬鹿な人」

その頬には一筋の涙が流れていた。

目指すはグラシャボラス家だ。

冥界到着（後書き）

書いてて思った。

ツツコミどころ満載じゃね？

主人公のカリスマ性は半端ないです
WWW

グシヤラボラス家(前書き)

題名と本文があまりうまく合っていないな、どうしよう？

グシャラボラス家

バイクを百キロぐらいの速度で走らせること約二時間、ようやく城が見えてきた。

「うん？　なんだあの集団は？」

目の前にはボロボロの姿になって、集まっている武装をした兵士達
バイクから降りて俺はその集団に近づく

「誰だお前は！！」

その先頭に立っているリーダーらしき男が俺に向かって叫んでくる。

「俺か？　俺の名は兵藤旅人、ちよいとグシャラボラス家に殴り込みに行く途中だ」

「お前が？　一人でか？」

「そうだが？」

一瞬の静寂、そして目の前の少年は口を開けた。

「お前も親父の様にバカなことを言うのだな」

「話から察するにお前の親父も殴り込みに行ったのか？」

「いや、親父はグラシヤラボラス家の血筋だよ。今の当主が無能で民たちに圧政をしているのは知ってるよな？」

「ああ、だから俺が来たんだ」

「その圧政のことを咎めたら俺らはやつらに殺されかけた。命ながら俺達は逃げてきたんだが親父は残って今も戦ってるんだ。本当、馬鹿だよ親父は」

「そうかい、なら俺もいくか。」

「おい、お前なにしてんだよ!？」

「あ？ だから殴り込みに行くんだって」

馬鹿かコイツ、自分から聞いておいて俺の話聞いてなかったのかよ。

「無茶だ、お前死ぬぜ」

その言葉を見殺しして俺はバイクに向かう。

「おい、聞いてるのかよ!!!」

俺の肩を掴んで無理やり振り向かされる。

だから俺は顔面を殴ってやった。

「ぐばあああああああああ!」

吹き飛ぶ少年

「はっ！ 黙ってるよ小物が！！」

「なん、だと、テメエ！」

ヨロヨロと起きてくる少年

「テメエの親父は必死に一人で戦ってるんだろ？ ならなぜに助けに行かない？」

「だってそりゃあ、戦力差がありすぎて無茶すぎるだろう？」

「なら無茶なことにも挑めない小物は黙ってる」

「だから誰が小物だって！？」

「お前だよ」

俺はバイクから離れ、少年に近づく

「お前は圧政を強いている当主に立ち向かったのか？」

「なにを言って—————」

「お前の親父は今も一人で立ち向かってる、大勢の兵士を連れて逃げた息子と違ってな」

「分かってるさ！ だけでもよ！」

「『だけど』も『もしも』も要らないんだよ。世界はいつも決意し行動を起こしたもののだけを認める。お前はなにもしてないのに諦めているだけだ」

今度こそ俺はバイクに跨り、城へと向かう。

さあ、やってやるぜ。

??? side

あの野郎の言葉がまだ胸に残ってやがる。

『世界はいつも決意し行動を起こしたもののだけを認める。お前はなにもしてないのに諦めているだけだ』

わかってる、わかってるさそんなこと。

「・・・・・・親父」

ちくしょう、あいつの拳が重すぎて頭がどうにかしそうだぜ。

それこそ無茶な挑戦をしたくなるぐらいによ。

side out

余談ではあるが

その後、グシヤラボラス家の御家騒動は多くの怪我人と死者を出し終結した。

そして最後まで前線で戦っていたグシヤラボラス家現当主は『この騒動を静めたのは一人の旅人である』そう語ったそう。

グシヤラボラス家（後書き）

まだまだ、旅人の冥界の旅は続きます。

そろそろエロ要素も入れたいな W W W

都心の冥界（前書き）

はあ、話が浮かばない

都心の冥界

一誠side

「バアル家の無能が——」

ドゴンッ！

激しい打撃音！ ヤンキーは言葉を全部言い切る前に——サイラ
オーグさんの一撃で広間の壁に叩き飛ばされていたっ！

ガラッ……。

壁からヤンキーが崩れ落ちて、床に突っ伏していた。

———— 一撃！

あんなに強い魔力を放っていたヤンキーをたったの拳一撃で！？

「言ったはずだ。最終通告だと」

迫力のあるサイラオーグさんの言動に、

「おのれ！」

「バアル家め！」

ヤンキーの眷属が主をやられた勢いで飛び出しそうになるが——

「主を介抱しろ。まずはそれが貴様らの「それには及ばねえよ」……なんだと？」

サイラオーグさんの言葉を遮ったのは他でもない飛ばされたヤンキー

おいおい、凄い打撃音だったのに気絶もしてないのかよ!?

ごろりと転がり、仰向けになるヤンキー

「お前ら、今すぐ拳を収めろ。今回の件は俺が先に挑発したのが原因だ、これ以上こちらが醜態を見せるんじゃないやねえ」

「しかし「良いから収めねえか!!」はいっ!」

なんでだろうか、殴られる前よりも殴られた後の方が恐さは減ったけども迫力が増してる。

ヤンキーは立ち上がり、メガネの姉ちゃんに振り返る。

「アガレスの、今回はすまなかった。どうやら俺も興奮してたみたいでつい挑発をしてしまった。まだ会合まで時間はあるし、化粧を直してこい」

「え、ええ、わかりましたわ」

メガネの姉ちゃん化粧を直しにどっかに行ってしまった。

「バアル家の、すまん助かった。お前が殴ってくれたおかげで上っていた血が下がった」

「いや、礼にはおよばん」

「それでもだ、まだまだ俺も修行が足りねえな」

首をゴキゴキと鳴らして言うヤンキー

「しかし俺は気絶させるつもりで殴ったのだから？」

「ははは、耐えられた理由は簡単さ。過去に一度、お前よりも何もかもが上の拳を受けたことがあるからだよ」

なんだって、あれよりも凄いのを受けたことがあるのか！？

俺が驚愕しているとヤンキーは俺に近づいて来た

他の仲間達が警戒態勢を取る中、ヤンキーは俺の目の前に立ち

「お前、兵藤旅人って名前に聞き覚えはあるか？」

「…………俺の兄貴ですけどもなにか？」

なんで兄貴の名前をこいつが知ってるんだよ？

「そうか、ならば旅人に伝えてほしいことがある」

ヤンキーは突然、俺に頭を下げてきた。

「お前の兄貴にグラシヤラボラス家は多大なる恩がある、もしも力が必要になったら言ってくれ。その時はグラシヤラボラス家が総力

を持って助けると、これは俺ら一族の総意だ。最後にもう一度、一族の代表としてお前の兄貴、兵藤旅人に礼を言う。ありがとう」

それだけ言うとヤンキーは元の場所に戻って行った。

兄貴……あんたなにしたんだ？

side out

（会合から少し前）

「おお……これはまた」

俺はアイラからもらったバイクで旅を続けている。

そして今日、ようやく街に辿り着いた

「なんか空は紫なのに東京みたいな街だな」

もしやここはパラレルワールドなのだろうか？

まあ、冒険できるならあまり関係がないけど

「きやあああああああ！ リアス様……！」

五月蠅え！

なんだと思って声がした方を見たら馬車の中から手を振るリアスがいた

「ほう、なかなかソックリじゃないか」
てか似すぎ、まるで本人みたいだもん

でもこんなところに居るわけないし、違うよな

今日はこの街に泊まっていこう

俺は宿を探しに行こうとしたら

「見つけたぞ！ その貴様、待つのだ！！」

後ろから車に乗り猛スピードでやってくる集団

あいつらは数日前から俺を追ってきている

理由は簡単

あいつら警察、俺は密入国者

「捕まる訳にはイカンのだよ！！」

「逃がすかああああああ！！」

なんでカーチェイスをしなきゃならねえんだ！

追ってくる警察の連中

だが舐めるな、アイラ印の改造バイクはそんなにちんたら走っては
くれないぜ！！

アクセルを全開にする

時速200kmほどの速度で走りだす

「え……？」

待て待て待て、落ち着け——

「ギャアアアアアア！？」

俺は風の如く都心部から離れて行ってしまった
いつかアイラに再開したら文句を言わなきゃな

都心の冥界（後書き）

とりあえず、次はイツセーが山籠もりしている頃のお話です。

ライザー・フェニックス（前書き）

サブタイでネタバレと言う暴挙に出てみたアザトクです
W
W
W

えていたことがある

伝説の龍の力を宿しているとは言え相手は悪魔に転生して間もない
そんな相手に負けてしまい、婚約を破棄され、俺にはなにが残って
いる？

眷族達のほとんど俺に愛想を尽かしているようにみえる

そんなことを何度も考えているうちに死のうとする自分が現れた

俺は素直にそんな自分に従い、家を離れて自殺しようとした

だが俺はフェニックス、不死鳥の一族

生半可なことでは死ねない

あらゆる手を試していて、今日は首吊りをするつもりだ

領内にある森の中、木に縄を掛けて輪をつくり首を掛けようとしたら

「ちよおおおと待てええええええええええ！」

いきなり一人の男が叫び声をあげながらバイクに乗り猛スピードで突進してきた

「ぐわあああああああ！？」

そして轢かれた

「だ、大丈夫か！？まだ傷は浅いぞ！！」

いや、それは俺が不死鳥の力があるからだ

普通の悪魔なら今ので死んでるか重症ものだ

「ぐう、貴様は何者だ？」

「おお……本当に生きてた」

質問には答えてもらえてはいないがどうやら自分のやったことについてには自覚があるらしい。

「もう一度聞くが貴様は何者だ？」

「俺か？ 俺の名は旅人、世界を旅する自由な旅人さ」

旅人だと？

俺が怪訝に思っていると男の見透かされるような黒い瞳が俺の瞳を覗きこんできた

「……ちよいと一緒に釣りしないか？」

「はあ？」

「いや、だからさ。釣りしようぜ」

どうせ死ぬつもりだったのだしそれも一興か

旅人と出会った場所から少し離れた場所

大きな滝の下流にある川辺に二人で来ていた

「釣竿がないのにどう釣りをするのだ？　まさか素手でやるわけはあるまい」

「ん？　それでも構わないけどそれは釣りじゃないだろ？」

そう言うとき旅人は近くにあった木の枝を二本だけ折って戻ってきた。

「これに持参した糸をつけて枝を釣り針の形にして先を尖らせると完成だ、ほれ作れ」

旅人に促され俺は渡されたナイフで真似をしながら作る。

途中、何度か指を切ってしまったがやってみると案外楽しくて集中していた。

「で、出来た」

出来た釣り針を旅人に見せる。

「おお、初めてなのになかなかの出来じゃないか」

見る限り世辞のようではないようで、俺は少し嬉しくなった。

次に餌を取ったのだが、冥界ミミズを素手で触るのには少しだけ滅入ったのは内緒だ。

「さて、餌も十分に取ったし始めるか」

岩場に座り釣りをし始めた旅人に習って横に俺も座る。

開始してから数分経つが反応がないことに俺は段々と苛立ってきた。

「ははは、そう苛立つな。もっと心を静めなきゃ魚は寄ってこないぞ」

俺はその言葉でハッとなり、深呼吸をして落ち着く。

そうだ、野生の動物は殺気に敏感なのだ。

「なにがあなたにあったかは知らんが、今は過去の事はいったん忘れて、目を閉じてこの自然を感じてみる」

自然を感じる？

意味が解らなかったが、とりあえず耳を澄ましてみた。

すると、木々が風によってざわざわと鳴っているのが聴こえてきた。

鳥が鳴く声が、川の流れる音が、風が吹く音が、さまざまな音が聴こえてきた。

鼻で息をすると水の匂いがしてきた。

森の匂いが、水の匂いが、動物たちの匂いがしてくる。

「そしてゆっくりと目を開けて」

言われた通り目を開ける

空を見上げるとそこはいつもの魔界と同じで紫色の空だった。

だけでもなんでだろうか、いつもより美しく見える。

目の前を向き、周りを見渡してみる。

さっきまで灰色だった世界が、今では色鮮やかに輝いて見える。

「どうだ、なにか気持ちは晴れたか？」

「……ああ、最高の気分だ」

俺は様々なものを失った。

仲間であり、誇りであり、名誉であり、地位であり

失ったものはデカく多い。

だがしかし、逆に今の俺には何が残っている？

それは分からない、だけでもそれを見つけたら俺はそれを一生大事にしよう。

今度はこぼさないように、しっかりと抱きしめて、共に歩んで行こ

う。

「なあ、貴方の名を教えてくださいだきたい」

「俺の名は旅人、兵藤旅人だ。気軽に旅人と呼んでくれ」

兵藤？ まさかとは思うが――

「旅人、お前の家族に兵藤一誠というやつはいないか？」

「俺の弟の名前だな」

弟？ くくく、これはなんの皮肉だ？

弟に破れ失われ、兄によって救われる。

どうやら俺は赤龍帝の一族に縁があるらしい。

「そうか、なら良いんだ。俺の名はライザー・フェニックス、覚えておいてくれ」

「わかったぜ、ライザー」

がっしりと握手をする。

「あ、これは俺の電話番号だ。もしもの時は電話してくれ、フェニックス家ではないが俺がお前に力を貸そう」

「生憎と携帯を持ってないから簡単に連絡は出来ないが家に戻ったりしたら手紙でも書くさ」

「ああ、それとこれは友になった印ではないが友に送りたい」

俺は懷から小瓶に入った、『フェニックスの涙』を三つ渡す。

「なんだよこれは？」

「む、そういえば旅人は人間だったな。それは『フェニックスの涙』
といって……簡単に言えば超凄い回復薬だ」

「へえ、そりゃあ大事にしなくちゃな」

その後、俺達は他愛もない雑談で盛り上がりながら釣りを楽しんだ。

「本当にいいのか？」

「ああ、構わない」

それから翌日、俺は旅人と別れることにした。

バイクで家まで運んでもらえるらしいが敢えてそれは断った。

「随分と遠くまでできてしまったが、なんとなく今は歩いて帰りたい
のだ」

「……なるほどね、じゃあ俺は別れさせてもらうか」

「ふふふ、いつかは家に遊びに来てくれ。歓迎しよう」

「そりゃあ楽しみだ、御馳走を期待してるぜ？」

「任せておけ」

もしも来たときは我が家の料理人の総力を持って絶品な料理を作らせてやる。

「じゃあ、またな」

「ああ、また会おう」

コツンと突き出した拳を合わせて、笑いあい旅人は走り出した。

その背中を見送り、俺は家の方向を向く。

「さて、ここから一週間も掛かるが……悪くはないな」

せいぜい自然を楽しみながら歩くとしてもするか。

s i d e o u t

ライザー・フェニックス（後書き）

ちなみに、この話での時期はパーティー間近ですがタイニーンにイッセーが追いかけている頃のお話です。

オフィス（前書き）

どうも、最新話です。

最近、ハイスクールD？Dの二次小説の量が増えて俺は嬉しい。

自分は古参の方なので皆さんがこの原作を知ってくれて感激しました。

オフィス

俺の目の前に立っているゴスロリの美少女が俺を指さして言った。

「我はお前を気に入った、だから我のものになれ」

「だが断る」

なんでこうなった？

時は二日前に遡ることになる

俺がライザーと別れてから数日、山岳地帯を走っていた。

今更だがこのバイクってなにを燃料に走ってるんだ？

ガソリンだとしたら相当、燃費が良すぎるぞ

密かに疑問を持ちながらも走らせていると残念ながら崖で行き止まりになっていた

「ふむ、なかなかの絶景だな」

この先に進むにはどうやら一旦戻って先ほどの分かれ道を左に曲がって山を降りて行かなければならぬらしい

でも道を間違えたおかげでこんな絶景が見れたのだし別に良いか

少し腹が減ってきたし、今日の昼はここで食べるか

「――お前は誰だ？」

突然、上から女の声がした。

顔を上げてみるとゴスロリ服を着ている美少女がいた

「……黒か」

「我の下着の色の話ではなくて貴様は何者だ？」

「俺の名は兵藤旅人、世界をさすらう旅人さ」

俺を下から上まで品定めするかのように見てくる

「ま、とりあえず嬢ちゃんも一緒にどうだい？」

「嬢ちゃんではない、我が名はオフィス。禍の団の主だ」
カオス・ブリケード

「そのカオスなんちゃらがなんなのか知らないけど、とにかく名前は覚えておーフィス」

するところか満足そうに頷き、俺に近づいてきた。

さて、仕度を始めるか

「ほう、では貴様は地球からやってきたのか」

モグモグとお握りを頬張りながら話してくるオフィス

「おう、なんか知らんが光に包まれて目を開けたらいきなりこの世界にいた」

オフィスの話によるとそれは次元転移“魔法”ではないかと言う

「じゃあアザゼルは魔法使いなのか……？」

「それが私の知っているアザゼルであるならば堕天使の総督だぞ」

………はい？

「まさかとは思うが貴様、この世界のことをなんにも知らぬのか？」

「恥ずかしながらまったく知らん」

オフィスの話によるとこの世界は人間界で言うところの冥界らしいつまり今まで会ってきた奴等は全員、人ではなく悪魔ということになる。

まあ、だからと言ってどうということはないが

むしろ、悪魔と友達になれたと自慢できる

「じゃあ俺は地球に帰れるのか？」

「出来る、割りと簡単に」

そっかあ、安心した

「じゃあこれで心置き無く旅が続けられる」

俺はオフィスが食べ終わったので片付けてバイクに向かう

「どこへ行く？」

「旅の続きだ」

例えこの世界が冥界だとしても所詮俺は旅人

旅を止める理由にはならない

「オフィスはこれからどうするんだ？」

思案顔をするオフィス

「どうせ暇をしていたところだ。お前の旅に着いていこう」

こうして俺の旅路に新たに仲間が加わった。

それからと言うものの俺達は一緒に行動し続け、時には村に訪れ魔物を退治して食事を貰ったり、自然の中で一緒に昼寝などをしたりと沢山のことがあった。

そして一週間が経ったある日の夜

俺とオフィスは森の中の湖の畔で火を挟んで食事をしていた。

「旅人よ」

俺が焼いている途中の魚を見つめているとオフィスが話しかけてきて俺を見つめてきていた

「なんだよ、魚ならまだだぞ？」

そんなにこいつってば食いしん坊だったか？

「魚ではない。旅人、聞け」

なんだよ、面倒くさいな。

そう思いつつも俺はオフィスの言葉に耳を傾ける

「この一週間、貴様とともに旅をして抱いた感情がある」

なんだよ、もったいぶるなよ。

立ち上がり俺の前までやってくるオフィス

「この姿、今までで一番のお気に入りだが、きっと旅人と出会うこの為にあったのだろうな」

俺の目の前に立っているゴスロリの美少女が俺を指さして言った。

「我はお前を気に入った、だから我のものになれ」

「だが断る」

急になに言ってやがるんだコイツは

「お前はただの人間だが我はそんなお前を気に入った。我が配下に加われ」

「そんなこと知らないな、俺は誰かの下に着くつもりはない」

えーと、確かこいつの組織ってカオスなんちゃだったよな。

「では無理やりにでも連れて行こう」

オフィスの右腕が突然、グレートレッドのような姿になって俺に迫る。

なんだよ、悪魔ってこんなことできるのかよ!?

「いいや……この感じはお前ってドラゴンか!？」

「正解だ」

迫ってくる右腕を俺は横に回転しながら受け流し、ついでに鱗と肉を抉って行く。

「ちい、右腕をもぎ取るつもりだったんだがな」

流石にそこまで甘くはないか。

俺は距離を置いて構えると、オーフィスがジッと自分の右腕を見つめていた。

なにがおかしいのか徐々にその顔は笑顔になり

次第に大声で笑い出した。

「ここは逃げるか」

バイクに急いで跨り、オフィスから背を向けて走り出す。

「逃がさん、貴様は絶対に我が手に入れてやる」

「ちくしょう、なんだってんだよおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！」

その後、俺はなんとか逃げ切れたものの、二日間はバイクで走り続けたのだった。

オフィス（後書き）

はあ、どうすっかな、この続きは？

パーティの裏側で（前書き）

サブタイが思いつかないですorz

パーティの裏側で

なんとかオフィスから逃げ切り、バイクを押しながら森を歩いていた

え？　なんでバイクで走らないのかって？

馬鹿野郎！　そんなことしたらエンジン音で付近を徘徊してるかもしれないオフィスに見つかるだろうが！！

それだけはイカン

あいつがドラゴン形態になったら俺も闘うしかない

なんか無限の力がなんちゃらかんちゃら言ってたけど、俺は人間だしドラゴンとそう何度も闘う気はない

そんなことを考えていると遠くの空からやってくる飛行物体を発見！

オフィスか！？

慌てて森に隠れて上空を過ぎて行くのを見守る

ん？　オフィスじゃない、他の竜か

安心した

よし、じゃあ先に進も————

「見つけたぞ、旅人」

ギギギと首を動かして振り返るとそこにはゴスロリファッションの少女がいた

「出たあああああああああああああ！？」

俺は逃げた、全力で、アクセル全開にして逃げた

「逃がさんぞ」

「来るなよおおおおおおお！！」

さっきから後ろで「ボロボロにして我が介抱すれば」とか「洗脳して我に従順にする」とか言ってるし

冗談じゃねえ、そんなことさせられてたまるかよ。

竜人化しているオフィスが攻撃をしてくる

俺はその迫りくる火球などを潜り抜けて二時間のカーチェイスでなんとか逃げ切れた。

一誠side

「「「ッ!？」」」

な、なんだよ今の感覚は

「ドライブに小僧……今を感じたか？」

『ああ、だがまさかこの魔力は』

「今のってまさか……ドラゴンが戦ってるのか？」

しかも強力なドラゴンだ

ドライブを宿している俺も今の感覚を感じ取れた

『まさかとは思うが今の懐かしい竜の波動は……』

「そんなはずがない、あやつがこんな場所に現れる上に闘うはずがなからう」

『それもそうだな』

むむむ、なんかタイニーンのオッサンとドライブが俺には分からない会話してる

でも今の感覚、さっき通ってきた方角だ

なにがあったんだろう？

S i d e o u t

「し、死ぬかと思った」

森の中にある開けた場所でorzしながら泣いていた

それはもう号泣さ！

なんだかストーカーに追われている女性の気持ちが良くわかるようになってきた

確かにオフィスは可愛いよ？

でもヤンデレっぽいし、ヤンデレは守備範囲外だし

なんとか立ち直り俺は顔をあげる

「こうしていても仕方がないし、もっと遠くに逃げるか」

結局は逃げることにした

「き、貴様は！」

男の声がしたので振り返るとなんか白髪っぽい人が睨んできていた

「誰だよアンタは？」

「貴様、俺の顔を忘れたのか！！」

いや、ごめん

マジで誰だアンタ？

「まあ良い、ここで会ったが百年目とも言うし以前よりも強くなつた俺の力を見せてやる」

だから名乗れよ

バランス・ブレイク
「禁手!!」

男が叫ぶと以前、学園で見た白い奴だった

「死ねええええええええ!!」

『Divide!』

なんか身体が重くなって動きにくい

「だから、遅いって」

ジグザグに動きながら俺に迫ってくる白いのを手首で払う

「ぐあああああああああ!!?」

それだけで吹き飛ぶ白いの

なんだよ、前よりもほんの少しだけしか変わってないじゃんか

ドゴオオオオン!

「ん?」

なんか向こうの空でさっき見たドラゴンと雲に乗ってる猿が戦ってる

パーティの裏側で（後書き）

感想お待ちしております

帰宅（前書き）

いよいよ6巻突入です。

ヒロインを誰にしようかと悩んでおります。

希望があつたら感想をよろしくです

帰宅

「ふふふ、逃げ場はないな旅人」

俺の後ろは断崖絶壁

くっ、俺はこのまま捕まって洗脳されるしかないのか？

「否、俺はこんなことでは諦めん!!」

かくなる上はオフィスと戦ってかつしか――

「ならば我の本気を見せてやろう」

戦闘力が53万の人の状態（第一形態）

戦闘力が謎な半竜化（第二形態）

そして今、目の前で最強の完全竜化（第三形態）が行なわれようと
しているとしても言うのか!!

「やっぱ無理!」

ごめん、俺は無力だよ

オフィスから背を向けて、崖からバイクで飛び出す。

アイラのバイクなら水の上も走れると信じてる!!

自由落下で内臓が上に上がって行く時の独特な感じがしながら俺は下にいきなり現れた空間の裂け目に吸い込まれた。

「嘘でしょうおおおおおおお！？」

親父、お袋、一誠、俺ってば、無事に帰れないかもしれない

一誠 side

俺達が冥界から帰ってきて、眷属のみんなが家に引っ越しが完了し始めたが兄貴が帰ってきてない。

子猫ちゃんは俺に甘えてきてくれるようになったが『やっぱり膝は兄さんの方が数倍は上です』と言われてしまった。

アーシアとゼノヴィアの二人も同じ意見らしい。

てか子猫ちゃんがやばい。

毎日『お兄さんはどこですか？』って聞いてくるし、『お兄さんが居ないだなんて鬱になります』とか言ってるし

日に日に子猫ちゃんから発せられる負のオーラが増していった。

そんなことを思いながらリビングから広くなった庭を見ると

「死ぬ、今回はマジで死ぬかと思った」

庭で見たことがないバイクの横でorzして号泣しながらなにかボソボソと言っている兄貴がいた。

思わず飲みかけていたお茶を木場に吹き掛けてしまった。

「イツセー君、僕なにか君に悪い事でもした？」

「ごめん木場！ 兄貴が庭で号泣してたから思わず吹いただけなんだよ！！」

「お兄さん！？」

ああ、子猫ちゃんが窓を割って庭に出て行く。

「ぐばああああ！ まさかのスピアタックルだとうー！？」

やばいな。今、兄貴の体が横にくの字に曲がってたもん。

「お兄さんお兄さんお兄さん！！」

「おおー、なんだなんだ！？ って子猫か、どうした？ イツセーに苛められたのか？」

ちょっと待てや兄貴、なんで俺が子猫ちゃんを苛めるんだよ。

「違います、今までどこ行ってたんですか？」

「旅」

それで全て納得させるのが兄貴クオリティー

とにかく、俺は子猫ちゃんが破ってた窓の修繕をどうしようかと悩

むのであった。

side out

「へえ、リアスの実家は楽しかったのか？」

「はい、とてもためになりました」

俺はこの家の居候がみんな居間に集まるまで子猫を膝に置いてチラシを見つつ、子猫の撫でながら話を聞いていた。

「うん、なんとなくしかわからないけども前よりも強くなったな」

「えへへ／＼／＼」

やはり子猫は可愛いな。

いや、子猫だけではなく俺の妹分は全員が可愛いぞ！！

「あうう、どうでしょうこれ」

そう思っているとアーシアが涙目で居間にやってきた。

「どうしたんだアーシア？」

「あ、おかえりなさいですお兄さん」

トテトテと近づいてくるアーシアの頭を撫でてみる。

「あわわ・・・久しぶりですこの感覚う」

とりあえず嫌がってないみたいなので安心した。

「あ、兄さんお帰り」

「おう、ただいままだなゼノヴィア」

同じく近寄ってくるゼノヴィア

ゼノヴィアの頭を撫でると少し恥ずかしいのか頬を赤らめてる。

「あらあら、兄妹で仲が良さそうですわね」

「お帰りの旅人」

次にやって来たのはリアスと朱乃

リアスの紅髪を見るとつい都心部で追ってきた自称魔王とメイドを思い出してしまうぜ。

「ただいま、残念ながらお土産はないぞ」

「「「ええ」」」

いや、妹たちよ。そこまで嘆かないでくれ。

さて、そろそろ全員がそろったのかな？

あとは木場と一誠か

「ごめん、遅れた」

「ごめんね義兄さん、寝坊した」

木場、あとでチョコレートスリーパーな

さて、全員そろったか。

俺になんか話があるとか言ってたからここに居るんだが正直追われ続けてたしぐっすりと眠りたい

「兄さん、気になったんだけどなに読んでるのですか？」

「これか？ 駒王学園の職員募集案内」

一瞬、場が静寂に包まれる。

「えええ！？ 兄貴就職するの！？」

「まあ、清掃員としてだけだな。流石に教師とかは無理だ」

体育の先生とかは嫌じゃないけども教員免許取るのが面倒だ。

「駄目か？」

「いやいや、駄目じゃないけどもなんでまた急に！！」

急になってわけじゃないぞ、夏休み前から決めてたもん。

「なんかさ、あそこって俺の勘が面白そうだって告げてるんだよね」

「・・・じゃあ生徒として来れば良いのではないかな兄さん」

「ゼノヴィア、それは駄目よ。今から入ったら私と朱乃と同じ学年、つまりは三年生で受験やらなんやら言われるから」

「どうせ貴方のことだからそんなところでしょ？」

「それ大正解！」

親指を立てながら言うところの場にいる全員が頭を抱えてしまった

何故だ！？

「まあ、今それは置いておくとしましようか」

リアスの顔が真面目になり、子猫に首撫でを始めた俺はつついそ
の可愛さに頬を緩ませる

「にゃ」

「可愛いな、コンチクショウ！！」

和む、異常なまでに和むぞ！？

「はいはい、その二人。イチャつくのも良いけど話を聞いて」

なんだよ、和んでいたいのに

渋々と俺はリアス達の方を見る

「話しというのはね、アーシアについてなの」

アーシアについて？

「嫁にはやらんぞ？」

「……それについては私も同感だわ」

「ええ！ 同感しちゃうんですか！？」

イッセーさーん！ って言いながら一誠に泣きついてしまうアーシア

「でも今回は結婚とかじゃなくてアーシアがストーカーされてるのよ」

………ほう？

「毎日毎日、手紙やプレゼントが大量に送られてきて内容めアーシアに対する恋文。アーシアにはその気がないから無視をするように言ってるんだけど日に日に悪化してるの」

ハアと溜め息を吐くアーシア

よろしい

「犯人は分かってるのか？」

「ええ、もちろん」

「名前は？」

俺はとりあえずライザーに電話を掛ける

冥界だから通じるか不安だったけど案外普通に通じた

『分かった、事情は把握した。ティオドロ家が相手だが貴様の頼みなら調べあげてやる。丁度そいつにはある疑いもあるからな』

「疑いつて……まあ良いや、恩に着る」

ガチャリと受話器を置いて電話を切る

居間に戻って俺は皆に言った

「信用のできる情報屋に頼んだからしばらくしたらそいつの情報を洗いざらいにして社会的に殺してやる」

「え？ いや、兄貴それはなかなか難しい人物だと思うよ？」

「心配すんな、家の家族に……妹に手を出そうとしたんだ。兄貴として例えそいつが異世界に居ようと潰す」

「……………本当に旅人ならやりかねそうね」

「なんでしょうね、この妙な説得力は？」

ハハハ、リアスに朱乃よ

マジで逃亡先が冥界ぐらいだったら逃がさんよ

だけど冥界だとオーフィスが居るかも知れないから嫌だな

関係ない話だけど、ゼノヴィアのボディラインがエロく感じるのは俺だけ？

わかってるよ、これがオーフィスからの現実逃避だって。

でもさ、ゼノヴィアのボディラインのエロさは凄まじいのだよ。

君達が分からないだけでね！！

「む？　どうかしたのか兄さん？」

「いや、なんでもない」

危なかった、もう少しでバレるところだった。

さて、じゃあ後は風呂に入って報告が来るのを気長に待ちますか。

久しぶりのベットで睡眠をとれることにウキウキしながらも俺は風呂に向かうのだった。

その頃、冥界の某所で

「くっ、旅人よ。どこへ逃げたのだ！」

未だに冥界を探し回っているオーフィスだったりした。

帰宅（後書き）

さて、次はゼノヴィアのボディラインのエロさとグレモリー眷属たちとの絡みです。

旅館 前篇（前書き）

しばらくこんな感じで話を進めます

嫌な方は申し訳ありません

旅館 前篇

三人称 side

「兄貴……本当にやるのか？」

「旅人、もしもことがバレたらどうする気だ？」

「そうだよ義兄さん」

「そ、そうですよ。流石に不味いんじゃないですか？」

「……………」

とある場所の一室、暗闇の中で四人の男たちと一人の男の娘が座っていた。

「……それでもだ、俺達はやらねばならない」

「でもっ！」

旅人の言葉に声を荒げて反応するイツセー

「黙っておけ一誠、覚悟がないのならここから去れ」

旅人は真面目な顔で言い放つ

「他の者もそうだ、ここからは覚悟がないものは去れ。覚悟がある

者だけがこの先に共に歩むことが許されている」

そう言う旅人からは覇者の如きオーラがにじみ出ている。

「僕は義兄さんに付いて行くよ」

「俺もだ」

木場とアザゼルは旅人の言葉に同意する。

「僕も参加させていただきます!!」

決意を固めた顔で返事をするギヤスパー

「さて、あとはお前だけだ一誠」

この部屋に居る全員の視線がイツセーに集まる。

「俺は————俺は進むよ、この先の領域に!!」

「ふっ、良い顔になった。——では、行くぞ!」

「」「おう!!」「」

今、熱き男たちの戦いが始まった。

side out

時は少し前に遡る。

事の発端は二日前、旅人が商店街のくじ引きを引いた時に起きた。

「二等が出たよ、おめでとうございまゝす！」

「え？」

カランコロンと鈴を鳴らすくじ引き所のおっちゃん。

「二等は四泊五日の箱根温泉の旅ペアチケット！」

はい、と軽く渡された俺

箱根温泉旅行のペアチケットか……たまには親孝行してやるか。

「え？ 良いのかい旅人？」

「ああ、たまには夫婦水入らずで行ってくると良い」

「あらゝ、しかも混浴だなんて気が利くじゃない。流石は私の息子」

ははは、褒めるな褒めるな。

「じゃあ、明日から行きましようかあなた？」

「じゃあさっそく用意しなきゃな」

部屋に戻って行く二人、なんとも嬉しそうでよかった。

さて――――――

「アザゼル、そこに居るのはわかっている」

「ほう、よく我の存在に気付いたな」

「くくく、貴様から放たれる殺気に気づかぬとでも？」

「ふっ、それもそうか」

「って、なにその喋り方？」

「殺気とか適当に言ったけども正解だったんだな。」

「アザゼル、お前に聞きたいことがある」

「なんだよ？」

「冥界で、ずっと思っていたことがある。」

「天使、墮天使、悪魔の三大勢力の話」

「異能の力が俺の家に浸食している件」

「お前ってさ————」

「もしも、こいつが俺の予想通りならばその時は————」

「ゼノヴィアのボディラインってどう思う？」

「エロくて最高だ」

ガシッと強く握手をする俺とアザゼル

「だよな！ お前なら分かってくれると思った！！」

ずっと冥界でオーフィスを見てて思ったんだ。

『そういや、ゼノヴィアもなかなかエロいよな』って

「ああ、任せてくれ。俺は乳の為に堕ちるぐらいだ」

流石です、アザゼルさん。

一誠 side

俺と木場とギヤスパーで俺の部屋でランプで遊んでいると居間から大きな音が聞こえてきた。

なんだと思って俺達は三人そろって様子を見に行った。

両親はさっき出かけたし、女性陣も朝から買い物だし……一体誰がどうしたんだろうか？

恐る恐る居間を覗いてみると兄貴が先生と殴り合っていた

「テメエ、ふざけてんじゃねえぞ！！」

「それはお前だろうがアザゼル！！」

ちよ、なにやってんの二人とも！？

ガチすぎる殴り合いなので俺と木場は二人を羽交い絞めにして喧嘩をやめさせた。

「離せイッセー、こいつはぶん殴らなきゃ気がすまん！」

「木場、今すぐアザゼルの野郎を殴らせろ！」

やばいって、二人とも頭に血が上りすぎてる。

「落ち着いてください先生！！」

「義兄さんも冷静に！！」

その後、最終的に兄貴に気づかれないようにギヤスパーの目の力も使ってなんとか喧嘩を落ち着かせた。

「で、なんで二人は喧嘩してたの？」

二人が落ち着いたところで俺はあくまでも中性の立場での事情調査を行う。

「それがな、最初は二人でゼノヴィアのボディラインがエロいよな
って話で盛り上がったんだ」

昼間からそんな話を：しかも居間でしてたとは流石です二人とも。

「そしたらリアスと朱乃のおっぱいも良いよなって話になったんだ」

最高です、あの乳は最高なんですよ！

「でな、ここからが本題なんだ」

途端に真面目な顔になる二人

「俺は爆乳よりも形の整って張りがある美乳が良いって言ったのに
アザゼルは大きい爆乳の方が良いとか言い出したんだ」

ん？

「はっ！ お前は爆乳に顔を沈めたときの感触を味わったことがないから美乳が良いって言うんだ」

「ふん！ アザゼルこそ乳枕をしてもらったことがないから爆乳が良いとか言えるんだ」

あんたらそんなことでなぐり合ってたのか……最高だぜ！

「良いか？ 乳は乳房の大きさ、乳輪の大きさ、乳首の大きさ、透ける血管、乳腺のコリコリ感、弾力性、温度、鮮度、湿度、色、形、張り、感度、匂い、味、この15要素で決まるんだぞ？」

「そんなことは分かってる、だからこそその爆乳だろう？」

やべえ、話のレベルが高すぎる。

「これが……世界トップクラスの實力だとも言うのか？」

木場！？ どうしたのいきなり！？

「流石ですね、完全に隙のない理論。これは膠着状態が続きますよ」
ギヤスパーまで!?

「よし、じゃあ温泉に行こう!!」

「「はあ?」」

どうしたんだよいきなり?

「実際に生乳を見に行こうって話だ」

「そこでお前とは決着を付けたやる旅人」

こうして、俺達は部長たちも含めて温泉に行くことになった。

s i d e
o u t

旅館 前篇（後書き）

さて、みんな。

自分の好きなキャラについての魅力でも教えて W

旅館 前篇2（前書き）

正直言おう、この旅館の話はネタが思いつくまでの時間稼ぎです。

旅館 前篇 2

「では前回、丸々一話使って回想を終わらせたのでそろそろ行こうか」

「お兄さん、いきなりメタ発言はやめてくださいね」

ギヤスパーの的確なツツコミが入ってきた

成長したなギヤスパー、あとで飴を買ってやろう

「参謀役のアザゼル君、此度の作戦と状況を教えてくれ」

「はっ、総司令殿」

非常にノリがよろしいなアザゼル

部屋の中央に地図を広げるアザゼル

「現在、俺達が居る場所はここだ」

ビシッと指をさすアザゼル

「目的地はこの露天風呂、ここに行くまでにルートは二つ」

「外か中からだね」

「木場の言う通りだ」

「じゃあ、ここは二手に別れて行くのか？」

一誠、やはりまだまだ甘いな

「いいや、イッセー。この旅館の名前を思い出してくれ」

そうこの旅館の名前は『グレモリー温泉旅館』つまりは資産家であるリアスの実家が経営している場所だ

まだオープン前で俺達以外に誰も居ないから他の客に迷惑を掛けることは無いが

「グレモリーの防犯設備は凄まじい、二手に別れて行動した場合、下手をしたら全員が死ぬ」

「な、なるほど……」

恐るべしリアスの実家

「今回は中から攻める」

わかるか？

つまりは——

「スニーキングミッション スタートだ」

三人称 side

「なんか：男性陣が静かすぎませんか？」

アーシアが身体を洗いながら皆に問う

「確かに、アーシアの言う通りだな」

同じくゼノヴィアも身体を洗いながら同意する

「きっと覗きの計画でもしてるんです」

実はその通りな子猫の予測にアーシアとゼノヴィアの二人は納得した

「そうね、アザゼルと旅人とイッサーが居るんですもの。まず間違いないでしょう」

「むしろあの三人が揃ってるのに覗きに来ない訳がないわね」

苦笑いしながら湯船に浸かるリアスと朱乃

「はあ、兄さんはまったく……」

「あら？　ゼノヴィアはイッサー君よりも旅人にご執心なのかしら？」

「え、ああ、いや……」

珍しく慌てるゼノヴィア

「お兄さんはそんな、えっちなことしません」

なぜか胸を張って言う子猫

「いいえ、まだ甘いわね。あのアザゼルとエロで渡り合える程の旅人が望きに来ないわけがないわ」

「「「「確かに」」」」」

女性陣がそんな話で笑いあっている頃、男性陣はというと

「しっかり手を握れ一誠!!」

「踏ん張るんだ旅人!!」

落とし穴に落ちかけている一誠をみんなで必死に引き上げていた

なんとか一誠を引っ張りあげて一息つく一同

「まったく、まだ先は長いってのにこの罠のキツさ。流石はグレモリ
ーの防犯対策だな」

「この落とし穴、そこに竹槍がありましたよ?」

下手したら命を失っていた一誠は泣いていた

「一旦、ここらへんで休憩がてら現状の確認だ」

旅人の言葉で全員が集まる

「皆、分かっているとは思うが俺達はまだ四分の一も進んでいない。

そして罾の危険度は先に進めば進むほど高くなっていく」

皆の顔が険しくなる

「通気孔には赤外線レーザーが張り巡らされていて突破は不可能、この道を進んで行くしかないのは必然的だ」

頷く一同

「ここからそこに見える曲がり角を右に曲がり、さらにその先の曲がり角を右に曲がる――そこがゴールだ」

U字路になっている道の先に露天風呂の入口があるのだ

「では、時間もあまりないし進むか」

立ち上がり前を見据える一同

「なんでもない廊下に見えるけど実は危険な罾が盛りだくさんなんだろうねここは」

「正直言って怖くてたまらねえ」

「僕は泣きそうです」

三人の言葉は弱気なものばかり

だが後の二人は違った

「進むんだイッサー達、例えこの道がどんなに険しくても」

「そうだ、歩みを止めた奴は決して理想郷にはたどり着けない」

この時、一誠たち三人は思った

『この人達に付いていこう』と

「全員、進むぞ!!」

男達の冒険はまだまだ始まったばかりだ。

s i d e
o u t

旅館 前篇2（後書き）

どしどし、話題をください。

原作のどこをイジるかを考えなきゃ。

ちなみに自分は6巻の表紙のゼノヴィアが大好きです W W W

旅館 中編（前書き）

そろそろ旅館編も最終回です

あと一話か二話ぐらいあります

旅館 中編

俺達の道のりは熾烈を極めていた

「『ココカラサキハイカセンゾ、ニンゲンドモ!!』」

俺達の目の前には高さが三メートルはあるゴツイロボット兵

「イッセー君、義兄さん、先に行ってください」

「木場、お前まさか……」

どこから出したかわからないけど木場は木刀を構える

「無茶だぜ木場!　こんなやつを一人で「分かった、任せたぞ木場」
兄貴!？」

イッセー、お前の気持ちは痛いほどわかるがここは木場の言った通りにしてくれ

「死ぬなよ」

「必ず理想郷（女湯）に一緒に行きましょう」

俺達は走り出す

「さあ、ご覧の通り君が相手にするのは剣戟の極地、無限の剣製、
恐れずして挑んでこい!!」

死ぬなよ木場！！

一誠side

木場が巨人を足止めして、なんとか一つ目の曲がり角を曲がれた。

しかし曲がった先は地図と違って扉があり、中は大きな部屋があった。

ダンスホールらしく、凄まじく広く大きい部屋だ。

俺達は警戒しながら進んで行く。

丁度半分ぐらい進んだところで異変が起きた。

『侵入者の排除を開始します』

天井が突然開いて俺の腰ぐらいの高さがある、昆虫のような形をした機械がやってきた。

中には空を飛ぶタイプの奴もいる。

「ポケットとすんなイッセー！ 死にたいのか！！」

先生の言葉で我に返る俺、そうだ逃げなきゃ！

全速力で駆けはじめる。

すると突如横から現れた鉄の壁によって向こうの道を防ごうとして

いる。

「な!？」

マズイ、このままじゃこの部屋に取り残される!!

「うおおおおおおお!!」

雄叫びと共に、俺、先生、兄貴はなんとかギリギリで壁を抜けた。

でもギヤスパーは――――

「おい、なに止まってんだよギヤスパー!？」

閉じていく壁の向こう側で立ち止まるギヤスパーに俺は叫んだ。

しかしギヤスパーは微笑みながら壁の向こう側に消えてしまった。

「おい……ギヤスパー!」

閉じてしまった壁を俺は思いっきり何度も叩いて呼びかける。

『イツセーさん、アザゼル先生、お義兄さん、先に進んでください』

壁の向こう側からそういう声が聞こえた時、俺は思わず叩く手を止めてしまった。

『このまま全員で進んでもどうせいつらは追いつきます。なら少しでも追いつかれるまでの時間を長くするために僕がここに残りますよ』

「無茶だギヤスパー、馬鹿なことを言ってるじゃん『先輩』」

静かに、それでいて力強い声でギヤスパーは俺の言葉を遮った。

『それでも僕は男の子です、心配しないでください。それに――
――』

少し溜めてギヤスパーは言う

『僕は先輩の仲間、リアス・グレモリー眷属の一人ですよ？』

ただ、俺はその言葉を聞いて下を向きながら涙を流すしかなかった。

『そろそろ行ってください、そしてまたゴールで会いましょう』

「っ！――ああ、またゴールで会おうぜ！！」

ギヤスパー、お前は成長したよ。

必ずまた生きて会おうな。

side out

ギヤスパーside

――行っただか。

僕は寄りかかっていた壁から離れて数歩前に進む。

『侵入者排除、侵入者排除』

目の前からは僕を排除しようと迫る百近い機械兵

正直言って怖い、今すぐにでも逃げ出したい。

昔の僕ならきつと逃げ出してただろう。

でもそれは今の僕じゃ絶対にできない。

そんなことをしたら皆が先に進むために犠牲になった木場先輩に顔向けできないもん。

迫りゆく大軍を見て、僕の頭を過る数々の思い出。

封印が解かれて、眷属の皆と過ごした生活

辛いことや悲しいこともあった。

でも毎日が楽しくて、笑った。

途中でお義兄さんも帰ってきて、賑やかだった日々が更に賑やかになった。

冥界でも沢山修行をしたな。

「さて、回想はここら辺にしておこう」

じゃなきゃこの決意が崩れちゃうもん。

「ふふふ、たかが雑兵の百や二百、相手になるよ。なんとって僕は吸血鬼、そして兵藤旅人の義弟、リアス・グレモリーの『僧侶』なんだから!!」

だからこんなところで死ぬわけにはいかないんだ!!

side out

旅館 中編（後書き）

感想をいただけると凄く嬉しいのでお待ちしております。

旅館 後編（前書き）

すみません、更新が遅くなりました。

オチが浮かばず、結局無理やり、しかも『ええ、ここまで引っ張っておいて』っていう終わり方に。

さっさと原作6巻に突入して誤魔化しちやおうかな？

旅館 後編

一誠 side

「手を離すんだアザゼル!!」

「馬鹿野郎! 死んでも俺は手を離さんぞ!!」

「今、引き上げるから待ってろよ兄貴!」

俺達があの後、なんとか二つ目を曲がりゴール直前と言うところで床がいきなり裂けた

落ちそうになった俺と先生のことを突飛ばして助けてくれたけどこうなってしまうている

俺が先生の足首を持ち、先生が兄貴の手を握っている

二人分はキツいけどここで俺が離したら先生と兄貴が落ちちまう

耐えるんだ俺!!

「俺に構ってる暇があるならば先に進め、でないと先に死んでいった奴らが無駄になる!!」

※木場とギヤスパーはまだ死んでません

「わかってるよ! でもそれが兄貴を見捨てる理由にはならないだろう!?!」

「そうだ、むしろここで見捨てたとあっちゃあ、それこそ死んだあの二人に顔向けできねえ！」

※木場とギヤスパーはまだ死んでません

「……お前ら」

兄貴は目を閉じてなにかを少しだけ考えてから

「まったく、仕方ねえ奴らだぜ」

呟きながら兄貴は先生を殴った

反射的に先生は手を離してしまい兄貴は落下していく

「あばよ、お前ら。先に俺は逝ってるぜ」

ガハハと笑いながら落ちていく兄貴

「兄貴いいいいいいいい！！」

俺の叫びは底が見えない地下へと吸い込まれていくだけであった。

「……………旅人の野郎、勝手に逝きやがってよ」

涙を堪えて先生が呟く

「兄貴い…クソッ…！！」

なんでだよ、なんでそんな簡単に助かるのを諦めちゃうんだよ！？

木場、ギヤスパ、兄貴

三人とも俺達のために犠牲になった、でもそうじゃないだろう？

皆で一緒に覗きに行くことが目的だったじゃねえかよ！！

———そうだよ、三人は俺達のために犠牲になったんだ。

「行こう、先生。みんなが作ってくれたこの時間がもったいない」

なら俺らはその期待に応えなきゃいけない。

死んでいった皆の為に！！

※三人はまだ死んで（ry

そして俺と先生は断固たる決意を胸に最後の曲がり角を曲がりに行くのであった。

竹槍、機関銃、エロ本、転がってくる岩、様々なトラップを回避してなんとか最後の曲がり角を曲がりあとは最後の直線だけとなった。

「よっしゃ！ 罠もなさそうだし突撃するぞ！！」

俺は嬉々として女湯の扉に手を掛けようとした。

したら———

「イツセー危ない!!」

先生が叫び声を上げながら俺を突き飛ばした。

なにが起こったのか理解できなかったが先生が仕掛けてあった罠に引っかけり電気でビリビリになった。

しかもそれが数分間も続いた。

終わった時には既に先生は黒こげになって倒れてしまっていた。

「せ、先生？」

俺はそっと倒れている先生を抱き上げる。

「イ、ツセー、か？」

「はい、先生。俺です」

「よく、き、くん、だ、ぞ」

これが最後の言葉になるかもしれん、と続ける先生

「前に、も、おっぱ、いは、無限の可能せ、いが、こめ、られてい
ると、言った、な？ 俺も旅人も、しょ、せんは、その、おっぱ、
いに、踊らさ、れて、いた、ただだ……ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ！
！」

必死に、死にかけの状態で俺に伝えてくる先生

「良い、か？ おっぱ、いは、揉む者によ、って、意味が、変わってく、る。自分がおっ、ぱいを揉む理由を、間違え、るな。そして、疑うな————ゴホッ！」

先生の手が俺の手を力強く握ってきた。

「ああ、良い人生だった。善き乳龍帝に、なれ、よ」

そして先生の手から力が抜けてするりと落ちていった。

「先生？ 先生！？」

何度も揺すってみるが反応がない。

先生まで——————どうして俺の仲間はこうも勝手に。

「先生、木場、ギヤスパー、兄貴」

わかってるさ、どんなに悲しくても俺は進まなきゃいけないんだよな。

そつと先生を地面に置いて、俺は立ちあがる。

「みんな、俺は行くぜ！！」

扉の取っ手に手を乗せた瞬間に俺の体に凄まじい重みが掛かる。

なにが起こってんだ！？

ゆつくりと俺は振り返るとそこには四人の魂が俺のそばに居た。

そっか、皆はずっと俺の側に居てくれたんだな。

「皆……わかったよ」

みんな揃って、ゴールしよう。

「さあ！ 今こそ理想郷（女湯）の扉をいざ開か」（ガララ）ふう、
良いお湯だったわね」…なん……だと？」

扉を開けようとしたら勝手に扉が開き、中からは部長たちが現れた。

「あ、あああ」

力が抜け、ガクンとその場で両膝をついてしまった。

「あら、イッセー。どうしたの、そんなにボロボロになって？」

湯から上りたての部長、とても妖艶でそそられるが今はそれよりも
絶望の方が大きく、両目からは自然と涙が滝のように流れ落ちる。

「イッセーさん、どうしたんですか!？」

「イッセー君!？」

「先輩……?」

「イッセー?」

部長の後ろから、アーシア、朱乃さん、子猫ちゃん、ゼノヴィアが現れた。

全員、湯から上がっちゃったのか？

てことは完全に俺達の理想郷はないってのか？

「イツセー、なんで泣いてるか知らないけどどうしたの？」

「そうですよイツセー君、そんなボロボロな姿で」

「と言うか、廊下も凄いことになってますよ！！」

ははは、なんてこった。

目を瞑って俺は仲間のことを思い出す。

「――――木場」

お前があの巨人を足止めしてくれたおかげで俺達は先に進めた。

「――――ギヤスパー」

いつも怖がりなお前だけど、あのロボット兵に立ち向かう姿、この目で見れなかったけども間違いなく漢だった。

「――――兄貴」

俺達を罠から救ってくれた。けどこの手で掴んでいたのに、結局は俺の力不足で離しちまった。

「――先生」

最後の最後で油断してくれた俺を助けてくれて、乳を揉む意味を考えさせてくれた。

みんなの力があつたからこそ俺はここまで来れた。

共に理想郷を見ることは叶わなかったけども、思いはちゃんと託されたはずだったのに――

「くっそおおおおおおおおおおおおおおお！！」

床に頭と拳を叩きつける。

「なにが思いは受け取っただ！　ただ俺は仲間を失っただけじゃないか！！」

そう、みんなから色々なものを託された俺が代わりに見なければならなかったのに、この様だ

「俺は、無力だ！！」

ごめん、みんな。

俺は覗けなかった。

かくして、俺はその後、一晚中泣いた。

今回の温泉旅行は仲間達を失い、心に大きな傷跡を残す結果となっ

てしまったのだ。

s i d e o u t

余談ではあるが、戦闘によって負傷した木場とギヤスパー、電気で麻痺したアザゼル、奈落の底に落ちた旅人が全員復活して戻ってきたのは温泉旅行の三日後の話であった。

旅館 後編（後書き）

ね、微妙だったでしょ？

感想をお待ちしています、できればあまり叩かないでね W W W

事務職員（前書き）

相変わらずサブタイは関係ないです。

感想でも怒られたけど、確かに言われてみれば戦闘シーンが全然ねえな。

そろそろ旅人の戦いが見たい？

事務職員

夏休みも残り一日、俺達は特になにをするでもなく家でノンビリしていた。

ちなみに俺はアーシアのストーカーの手紙の中に紛れていた俺宛の手紙を読んでいる。

送り主はライザー

わざわざこっちの世界の文字で手紙を送ってきてくれた

冥界の文字で書かれてもわからないだけだったし助かる

「へえ……禍の一人カオス・プリケードねえ」

アーシアってば妙な連中に狙われてるのな

うん？

なんか禍の団ってどこかで聞いたような……

そこまで思っただけ俺は便箋の中にまだ手紙が入っているのに気がついた。

「ははは、楽しく元気そうに生きてんなこいつら」

そこには何枚かの手紙と農具を持って泥まみれになりながらも笑っている人たちの写真

その写真に写っている人達の中央には一人だけ繋ぎに工具を持って笑っている少女が居た

これはアイラの村の人たちだ

なんでも領主が変わってから一気に治安が良くなったらしい。

領主っていうとあのヤンキーの親父か

「うん、安心した」

あの親父さんなら大丈夫だ、ちゃんとやっていけるだろう。

あと、その領主のグシャラボラス家ってところが今度、冥界に来たら是非にお礼がしたいから立ち寄っていつてくれらしい

お礼ねえ……いらないから寄らなくていいや。

「おや、なんの手紙かな、兄さん？」

「んあ？　なんだゼノヴィアか」

リビングにやってきたのはゼノヴィア

そーういや、やけに静かだな

「なんだとは酷いな」

「すまん、やけに静かだから誰も居ないかと思ったんだ」

「他のみんななら買い物に行ったよ」

「お前は付いて行かなかったのか？」

「特に欲しい物は売ってないからね」

喋りながらゼノヴィアは俺の隣に腰かけてくる

このソファは三人用だから熱いし離れば良いのになんで俺の近くに座るのだ？

「で、なんの手紙？」

「遠い場所に居る、俺の大事な仲間たちからの手紙さ」

いつかまた会いたいぜ、お前ら。

行けるなら今すぐにでも行くけども、なんかまた不法入国だとか何とかで終われそうだな

あの紅髪と銀髪メイドはもう勘弁したい

「今度、私も兄さんに付いていこうかな？」

「来たければ良いぞ、丁度バイクも二人乗れるし」

けども俺は別に“いつも通り”の旅をするつもりだ。

もちろん命の危険もあるかもしれない、ゼノヴィアは強いのか分か

らないけども……もしもの時は俺が守れば良いか。

「ほ、本当か兄さん！」

「本当だから零距离で話すのやめて」

近いとかの問題じゃないからね、そんなおでこをグリグリと押し付けてこないで。

しかしこの喜びようは、ゼノヴィアも旅が好きなのかな？

これからどこかに行く時は誘ってやるか。

「ま、可愛い妹分の頼みだ。それにこんな美少女と一緒に旅が出来るかもしれないってのに俺が断るか」

一誠あたりには嫉妬されるかもしれん。

てか、あいつは既にハーレムもどきを作ってるし

むしろ俺が嫉妬したい

「そ、そうか、美少女か／＼／＼」

ゼノヴィアが顔を真っ赤にしている

なにがあっただんだ？

「そろそろ昼飯時だし、ソーメンでも作るか」

そんなほのぼのとした夏の一日だった。

翌日、みんなが始業式に参加しに学校に向かったあと俺も同様に学校に向かった

ゆっくりと通学路を歩く

本来なら俺もこの道を生徒として歩いているはずなんだよな

そう思うとやけに学校に通っておけば良かったと後悔の念が浮かんでくるが、あと一年もないのに行く意味だ

時間は誰の都合でも待ってくれない

刹那の時を確実に進む

だからこそ人は生を謳歌しようとする

だからこそ人は感情をあらわにする

だからこそ人は醜い

だからこそ人は美しい

この刹那に全力で生命を注げている人間は眩しいのだ

一瞬前までのことを懐かしみ切なくなるのは仕方がない

でもいくら切なくても今を生きなければならぬ

それが生きるということだ

「つて、なに考えてるんだろう俺は？」

柄にもなく哲学的なことを考えちまった

ゆつくりと歩き俺は駆王学園に到着する

既に面接には合格して今日が初出勤だ

新しい職場がどんどこどキドキしながらも俺は校舎の中を歩く

案内板を見ながら事務室に向かい、事務室の扉を開ける

中はタイルの床で三畳ぐらいの部屋

真ん中に丸テーブルと椅子が二つ

あと隣の部屋に五畳の和室がある

「おお、あんたが新しく入ってきた人かい」

そして中にはヨボヨボの爺さんがいた

「あ、どうも初めまして。兵藤旅人と言います」

「これはこれは、ご丁寧にどうも。私は氣道玉神きどうたまごしんと申します」

名前はとても厳ついが好々爺のような印象を受ける人だ

だがこの人、血の臭いがする

隙も見当たらないかなりの実力者か？

「まあ、座んなさいな旅人君」

「失礼します」

だが特にそんなことは関係がないので言われた通りに俺は氣道さんと机を挟んで正面に座る

「挨拶もすんだし、まずは仕事の話しかの？」

これが氣道玉神さんとの初めての出会いで、俺の人生に大きく関わってくる人との出会いだとはこの頃の俺には分かるはずもなかった。

事務職員（後書き）

次回のお話から原作六巻と同じ時間系列になります。

オークション（前書き）

長い、ここまで長く書いたのは初めてじゃないか？

でも前回言ってた戦闘シーンが思ってたよりも少ない

期待してた方は申し訳ありませんでした。

それと今更ながらこの作品について注意を

この作品は基本的に原作の裏側で話を進めます。

その上、オリジナル設定も多く含んでいるので原作と違う話になるのも多いかもしれません。

それが嫌でしたら戻られてください。

では、長くなりましたのでそろそろ本編にどうぞ

オークション

「…………へえ、なかなかの殺気じゃん」

両親が寝静まってしばらくしてリアスや一誠達が外に出かけたあと俺も殺気を感じて出掛けていた

殺気を感じた数は二つ

向こうは誰が向かって既に戦闘が始まっているようだ

案外リアス達だったりしてな……それはないかWWW

とにかく俺はもう一つの殺気の方に向かう

俺の予想ならばこの先に待ち受けているのは――

「ははは、ビンゴみたいだな」

見つけたのは残念ながら悪魔や堕天使ではなかったが、白衣を着たガリガリの男だった

「おや、君はどちらさまだい？」

「ただの通行人Aだ、気にせずに続けてくれ」

「それは助かるよ」

笑顔で答えた白衣の男はグツタリとしている女性に向かってまた腰

を振りだす

女性の背中には六枚の羽根がついている。

白い羽が真ん中に二枚、そして黒い羽が上下に二枚ずつ。

あともう一人、少し離れたところに金髪の少女が拘束されていた。

拘束されている少女は気絶しており、触手で縛られている。

てか拘束の仕方が触手って、エロいな。

詳しくは言わないけども、少女の方はちゃんと清潔なまもらしい。

「その女を貰って良いか？」

「構わないよ———と言いたいところだけど、残念ながらそれは無理な話なのだよ。うっ、出る!!」

無反応な女の中に子種を出した白衣の男

「レ○プか、俺には興味がない範囲だな」

「それは残念だ。実に良いものだよ、女性が泣き叫びながら性行為をするのは非常に興奮する」

「ふーん、そうかい。それは俺も分からなくはないが俺の場合は合意の上で俺が攻めに回るね」

「この犯してる感じが良いんじゃないか」

ああ、わかった。

こいつとは性癖が全然違うな。

「あと————その女、死んでるぞ?」

「それもまた私を興奮させるよ」

下種が、死体をレ○プするなんて狂ってるにも程があるぜ。

「そうかいそうかい。まあ人の性癖にとにかく言う気はないし? どうでも良いが、そこの拘束されてる娘って実は俺の知り合いなんだよね?」

「ほう、なるほどなるほど……では、力づくで奪ってみるかね?」

ドゴンッ!

上空から人影が現れ、地面を陥没させて着地した。

「……………まるでキメラだな」

一応、人間の形はしているが体全体を肥大し過ぎた筋肉で包まれており、顔も人だかなんだか分からないほどにグチャグチャだ。

まるで巨大なトカゲのような尻尾が生えており、爪が鋭く岩をも裂けそうだ。

「見たところただの人間のようなのだが、よくぞ正体を見破ったね。こ

れは人間をベースに冥界や天界を問わず様々な生き物を合成させた
キメラなのだ!!」

恍惚とした表情で語る白衣を着た男

どうやら思った以上に外道な野郎だな

「さあ、攻撃しろ！」

「■■■■■■■■■■！！」

俺は咄嗟に上半身を逸らす、するとギリギリのところをキメラの爪
が通った。

距離を取り、冷静に敵を見据える。

俺の頬には三本の細い傷跡が出来て、血がタラリと流れ落ちる。

「ほう、人間の分際でよくも避けたものだね！」

ゲラゲラと耳障りな笑い声をあげる白衣の男

その間もキメラは俺との距離を詰めてきて、攻撃してくる。

流石はキメラ、合成生物と言うだけあって威力も速さも尋常じゃない。
い。

「この子は私の最高傑作であってね、現在の赤龍帝や白龍皇よりも
遥かに強い————まあ、覇龍を使われたら流石に敵わないだろ
うがね」

なんとなく凄いつてのは分かったが、赤龍帝やら白龍皇やら覇龍やら意味が分からない単語並べやがつて、もう少しわかりやすく言うてくれ！！

「ああああああああああ！！」

お互いの蹴りが交差した部分を中心に軽い衝撃波が出来る。

威力で押し負けたキメラが数歩後退する

今すぐにもあの白衣の男を殺してやりたいがキメラのせいで辿り着けない。

「ちくしょう、なんでそんな悲しそうな目なんだよ」

拳から伝わるのは救いを求める思い

「■■■」

低く唸るようなキメラの鳴き声

なるほどな、なんとなくだけと言いたいことは理解した

「安心しな、お前はちゃんと今すぐに壊してやるよ」

心を限りなく無に近づける

「壊すだと？ ただの人間が？ 私の最高傑作を？ ふざけるのも

大概にしたまえよ、やれキメラ！！」

「■■■■■■■■■■！！」

眼前に迫り来るキメラ

「白衣を着た男よ、確かにこのキメラは強い……………だが」

俺は右腕に力を込める

「この程度が最高傑作ならば貴様はそれまでだ。上には上が居ると知れ」

力任せに“空気を殴った”

「ば、馬鹿……………な」

殴り飛ばされた空気はカメラの心臓部分を貫き、その向こう側に居た白衣を着た男をも貫いた

「■■■■」

プルプルと震えながら俺に手を伸ばしてくるカメラ

俺はそっとその手を握る

その手には金色の羽の形をしたブローチがあった

「ま…ち…ばず…れの…はいごうじょ…うゝにいげ…」

聞きとりづらいがしっかりと人間の言葉でなにかを伝えてくるカメラ

「廃工場だな、わかった」

「どこに…■■■■がある」

「なんだ、なにがあるんだ？」

くそ、上手く聞き取れない

「それは、ずべでを————ずるだめの鍵だ」

「鍵？ なにをするための鍵だ!？」

「全てを————ゴフツ!！」

吐血するキメラ、これ以上は無理か

「ならアンタが人間だったころの名前を教えてください」

白衣を着た男は『このキメラは人間をベースにしている』と言った
ならば名前ぐらいあっただろう

「しのめ ゆうや東雲雄也、ぞれが、おでのなばえだった」

東雲雄也だな、しっかりと覚えた

「ざいごに、おでをごろじでぐれでありがどう」

そして生き絶えるキメラ——いや、東雲雄也

死に絶えてしまった東雲雄也は塵となる、同様に白衣を着た男も塵となった

「あばよ、出来ればお前が人間である内に出会いたかったぜ」

それから一時間後、俺は東雲雄也の言う通り街外れにある廃工場までやってきた。

そしてその入口の前には屈強な黒服の男が立っていた

「なんだ貴様は？」

む、やはり通せんぼを食らったか

ならば試しに先程渡された羽を見せてみる

「失礼いたしました、どうぞこちらをお付けの上にご入場ください」

渡されたのは仮面舞踏会とかでよく見かけるような仮面

「よろしければ衣装の方と傷薬の方もご用意しております」

「助かるよ」

…………キナ臭そうになって来やがった

廃工場の中にある魔方陣で、なにやらデカイ屋敷の前に転移した

中に入り、用意されたタキシードと仮面を付けて俺は案内人が言う

“会場”へと向かう

会場内には正面にオペラでもするのかと言うぐらいデカイ舞台があって、その前に高級そうな椅子が何台もあった

既に満員近い人が入っており、ヒソヒソと話し声が聞こえる

内容は全部『今日の商品は』とか『絶対に落としてみせる』とか
そんなのばかりだ

なるほど、オークションでもやるらしいな

「おい、貴様」

俺が椅子に座ると隣の奴が小さい声で話しかけてきた

「なぜ貴様がここにいる？」

「誰だよお前？」

「つと、すまん」

少しだけ仮面をずらして素顔を晒す男

「っ！？ ライザーじゃねえか」

大きな声を出しそうになったがなんとか抑える

「久しぶりだな」

「おう、久しぶり。で、なんでお前がいるんだよ？」

「それはこちらの台詞だ。俺は来たがらない父の代わりに強制的に参加だ」

「…………このオークションって冥界にも関係してるのか？」

「うむ、冥界だけでなく人間界や天界も関わっている」

天界か、まだ行ったことはないが天使とかがいるのか？

「ここではなにを出品するんだ？」

東雲雄也はここになにかの鍵を握るものがあると言っていた

まさかだとは思うが先程のカメラのように実験動物や奴隷にさせるための人をオークションに出しているのか？

「安心しろ、人身売買などしているならフェニックス家が全力で潰している」

「ならなにを出してるんだ？」

東雲雄也が言っていた鍵とはなんだ？

「―――裏物の品さ」

つまりは盗んだ貴重な展示品や表には公式に出せない品々のことか

「フェニックス家たは全体的にコレクションなどの趣味がないからオークション自体に興味がないので今まで参加を断っていたのだが、父上が断るのを面倒くさがり俺の社会復帰と称して参加させてきたのだ」

そういやこいつ、引きこもっていた上に家出したんだもんな

しかし、訳あり商品か

人身売買でないのなら出品される物が少しだけ楽しみだ

そう考えていると突然頭に

『ワタシヲミツケテ』

そんな声が聞こえてきた

なんだよ一体

『ワタシヲミツケテ』

……聞く耳なしか

しかし、この感じはアイツを助けた時の感覚に似てるな

アイツを助けたら厄介事に巻き込まれたが……なんだかんだで楽しかったし充実してたな

まあ、そんなことは良いさ、俺はかくれんぼは好きだぜ

「ライザー」

「なんだ？」

「少し話を聞かしてくれ、面白くなりそうだ」

俺達はオークションが始まる前に会場を出て正面ロビーに出る

「で、話とはなんだ？」

「まずはここがどこに位置する場所か知っているか？」

「人間界の日本海域にある地図に乗っていない小島だ」

「地図に乗っていない？」

「この島は昔から裏を知っている人間と悪魔達の高級リゾート地として使われていてな、地図に乗せて方が一の事が起きては洒落にならない」

なるほど、人間がこの島を開発されに来てしまっても面倒なだけか

「ではこの島から脱出は可能か？」

「物理的には難しいだろう、超高度な結界で島全体を囲んでいる」

「ならば魔方陣での転移が一番現実的か」

俺が知る魔方陣は通ってきた一つだけ

他にも魔方陣がある可能性はあるが今は探す時間はないか

「助かった情報は十分だ」

さて、はやく行きますか

「待て、なにをする気だ旅人」

なにしてそりゃあ決まってんだろ

「隠れんぼ」

「はあ？」

「ふふふ、まあまた会おうぜ」

いっちょ覚悟決めなきゃならんようだ

俺はライザーに背を向けて歩き出すと同時に会場ではオークションが始まる

これで会場以外の警備は多少手薄になるはずだ

宝物室を探していると銃器を持った黒服の男が一人で一服していた
一気に男に接近し背後をとって男の腰のホルスターに入っていたナイフを奪い首筋に押しつける

「動くな、声を出すな、少しでも不自然な動きをしたら殺す。俺の質問だけに答えろ」

「わ、わかった」

「この島に転移魔方陣はいくつある？」

「み、三つだ。天界と冥界と人間界の日本本州に繋がっている」

冥界や天界に転移しても仕方がないし、やはり最初に通ってきたあそこだけか

「宝物室はどこだ？」

「最上階の部屋だ」

地図を見た限りでは繋がっている二室だけのはずだ、奥の方の部屋が宝物室と考えるのが当然だろう

首筋をナイフの柄で叩いて黒服の男を気絶させて物陰に隠す

一気に階段を駆け上がり最上階

最上階は特殊な造りで階段を上がると一本道だ

「…………マズイな」

扉の前には銃器を持った二人と黒髪の女

「なんで“黒歌”が居るんだよ」

黒歌 side

「はぁ、暇ね」

私は部屋の外の警備を男達に任せて中で一人で休憩する

なんとなくこのオークションの警備のバイトを受けたけど、全然面白くない

思えば最近、面白いことが少ないわね

なんていうか張り合いがないというか……

ヴァーリーの仲間になって多少はマシになったけども、なんか違うのよね

思えばあの頃が楽しくて充実しすぎたのよ

毎日が必死であの人の側に居れた

半年以上経った今でも毎日の如く夢に出る

私はソファに横になってクッションを抱きしめる

「また会いたいよお、“旅人”」

一緒にご飯を食べて、一緒に寝て、一緒に旅がしたいよ。

でもそれはもう不可能な話

だって旅人は私の目の前で突然現れた次元の狭間に吸い込まれたんだから。

あそこに普通の人間が吸い込まれて助かる確率は奇跡にも等しい。

「グスッ、まだまだ旅がしたいよ」

また眠ろう、そうすればまた旅人に会えるから。

そう思っていたら廊下の方からドサリというなにかが崩れ落ちた音

がした。

ついでに一瞬だが闘気も感じた。

「……敵襲か」

せっかく旅人と会えると思っていたのに邪魔をするだなんて……殺してやる

臨戦態勢になり部屋で待ち構える。

敵の狙いは宝物室のものだろうし、この部屋を通っていかねば絶対に通れないはず。

ギギギ、と音を上げながらゆっくりと扉が開いていく。

面倒臭いわ、扉ごと壊しちゃいましょう。

魔力弾を放とうとしたら扉越しに声がした

「ちょ、待ってくれ！　こちらは無闇に戦闘する気はないってば！
」

ピタリと私の動きが止まる

え、この声ってもしかして――――

「……旅人？」

「……違います」

恐る恐る私は扉に近づいて開けてみると

「……………」

「……………」

そこには冷や汗をダラダラと流した旅人が居た

「……ふえ」

本物の、本物の旅人がここに居る。

「ふえええん、寂しかったよ旅人お」

そう思うと自然と涙が溢れてきてしまい、旅人の胸に飛び込んだ。

side out

「落ち着いたか？」

「……うん」

俺にプレッセンホールドされて丸まっている黒歌

生存を報告していなかったことに罪悪感もあってどう接したら良いか分からなかったが泣きつかれたことでなんかそんなことどうでも良くなった。

「ごめんな、今まで心配させて」

「本当よ、寂しかったんだから」

ギョツと俺の服を掴んでくる黒歌

「久しぶりの旅人の匂いだ」

なんか前よりも可愛くなったな、コイツ

「久しぶりの再会だけど、ごめんな。俺、やることあるんだ」

「……（ホロリ）」

泣かないでくれ！ 俺の心に罪悪感が半端なく来るから！！

「グスッ、なに用事って？」

おお、堪えてくれたか、流石は黒歌

「隠れんぼだよ、どうやらその部屋にいるらしくてな」

黒歌を降ろしてここで待機させ、俺は宝物室に入る。

中には様々な品が保管されており、どれもこれも貴重な物なのだろう。

その中で、俺は一つのトランクに注目した。

これが今回の目玉商品なのか知らないが、これだけ他と扱いが違う気がする。

試しに触れてみると

『ワタシヲミツケテ』

どうやらこれで間違いなさそうだ。

だが開ける前にやる必要がある。

「黒歌、おいで」

「んにゃ？」

呼ばれるがままにやってくる黒歌

「どうしたのかにゃ、旅うdングッ！」

やってきた黒歌の唇を無理やり奪う。

「ちゅ…ちゅ…ぺろ」

「ちゅ…れろ…ちゅ」

舌と舌が触れ合い、俺は黒歌を強く抱きしめる。

「ぺろ…れろ……ぷはっ」

トロンとした表情で俺を覗き込んでくる黒歌

「はぁ、はぁ、旅人」

俺を求めてくる黒歌はとてもそそのるのだが――――

「すまない、今日はこれで許してくれ、この続きは今度な」

「え？」

首筋に俺の手刀を当てて気絶させる。

倒れるところを俺が受け止めて、ソファに寝かしてやる。

そろそろオークションの前半戦も終わりに近いのだ、後半戦の為に品を取りに来る前に脱出しなければ。

急いでトランクを開けて、中身を確認する。

「おいおい、マジかよ」

その中には翡翠色の髪をした全裸の5歳ぐらいの子が入っていた。

息を確かめるとまだちゃんと生きている。

とにかく、こいつが俺を呼んでいたのなら即刻連れて帰ろう

タキシードを脱いで少女の体を包んでやり抱き上げる。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリ！！

それと同時に警報のベルが鳴った。

どうやら見つかったらしいな。

廊下の向こう側にある階段からいくつもの足音が聞こえる。

「……………賭けに出るか」

ここは五階、そして眼下に見えるのは日本への転移魔法陣

正確にあの魔方陣に飛び降りれば怪我はしないか？

基本的に耐久力は普通の人間なんだし……でもこの前、俺ってば学校の屋上から飛び下りてたし大丈夫か？

この子を戦いに巻き込むわけにはいかないしな

「じゃあな、黒歌。また会おうぜ」

そして俺は魔方陣に吸い込まれるように飛び降りて、脱出するのだった。

オークション（後書き）

物語の第一部のようやく本編に入ったって感じです。

黒歌ってこんな感じで良いんだっけ？

違うような気がするぜwww

ちなみにですが、今はイリナが学校に来る前日の夜です。

技説明

『空気殴り（仮）』

空気を超高速で殴ることによって瞬時に空気を圧縮させ前方に放つ技
途中で方向を曲げられないが貫通性と速さはピカイチ

こんな感じでいかがでしょうか？

感想をお待ちしております。

キャラ設定（前書き）

どうも、今回はキャラ設定です。

どうでも良いから本編は？ って方はもうしばらくお待ちください。

キャラ設定

ひょうどう たびろうど
・兵藤旅人

身長 176センチ

体重 78キロ

容姿 『真剣で私に恋しなさい!』の風間翔一の髪を黒くして、イッセーに少し近づけた感じ?

人ながらに超越者クラスの力を持つ人間

耐久力は人間と同じぐらいで、普通に包丁とかで指を切るぐらいの防御力

だが、屋敷の五階や学校の屋上から飛び下りても無事なのはきつとなにかの補正が掛かったから。

人間としてのスペックをほとんどが上回り、イッセーやヴァーリィが覇龍化しても余裕で戦える…かもしれない。

旅先で厄介事に巻き込まれやすく、グレートレッド以外にもドラゴンや違う種族にあったことがあるらしいがそれはまた本編で。

・謎の少女

身長 126センチ

体重 幼女でも女の子の体重は聞いちゃ駄目なんだよ?

容姿 ぶっちゃけ、『英雄伝説 零の軌跡』のキア

作者がファルコンのゲーム、空の軌跡シリーズの『碧の軌跡』の発売のためのPVを見てテンションが上がりまくり、出すことにしたキャラ

軌跡ネタで登場させて、今更ながらにこれからの展開に悩んでいる
www

名前も思いついていないので『もうキアで良いかな?』と言う甘えに走ろうとしている。

この作品で、実は中心にいる人物の一人。

・氣道玉神
きどう ぎよくしん

身長 170センチ

体重 62キロ

容姿 スキンヘッドで好々爺のような雰囲気醸し出している。

駒王学園で旅人以外の唯一の事務員さん

この物語で重要な人物の一人

具体的には旅人の人生を左右することになるほどの人物
謎が多い人

キャラ設定（後書き）

さてさて、これから先の設定はどうしたものか？

新しい家族（前書き）

前々回に比べてかなり話が短いW

それと謎の少女の名前と容姿をまるまるキーンと同じにしてしまつて反省中

叩くなら叩けよ！

俺は後悔してるから！！

新しい家族

なんとか脱出に成功し、俺は家へと帰って来た。

俺以外の家族は全員帰ってきているらしく、寝静まっている。

リビングにこの子と一緒に行き、目覚めるのを待つ。

「ライザーめ、なにが人身売買はしてないだ」

ばっちり人間売ってるじゃないか

だがライザーに限ってそんな類いの嘘をつくはずがない

ならばライザーすらも知らなかったのか？

その可能性は高いだろう

あのオークションが続けられた理由の一つは人身売買をしなかったからだろうしな

「ん……ふぁ」

「お、目覚めたか」

翡翠色の髪をした少女が目を覚ました

「……………」

寝ぼけた眼で辺りをキョロキョロと見回す謎の少女

「……誰？」

まずは場所じゃなくて俺が誰かと尋ねるとは、やるな。

「俺の名は兵藤旅人、世界を自由に駆け巡る旅人さ」

「たびうど？」

俺を指さしながら首を傾げる少女

「そ、旅人」

少女の頭を撫でながら笑いかける

気持ち良さそうな顔をする少女

「たびうど、旅人」

何回か俺の名前を繰り返し呼ぶ。

「えへへ……良い名前だね！」

ちくしょう、可愛いな

「……なにしてんの兄貴？」

なにかが俺の中で止まった

「あら、誰かしらその子？」

「しかも裸です」

ゆっくりとギコちなくだが後ろを振り向く

そこにはオカルト部の面々と両親が居た

『……………』

よし、現状を整理しよう

タキシードに身を包んだ全裸の幼女

その頭を撫でている俺

『へ……………変態だあああああああああああああああ！
？』

「違うんだあああああああああああああああ！？」

世界よ、俺になんの怨みがあるのだ？

みんなへの必死の説得の末になんとか誤解を解いて、俺は再び少女と向き合う。

ちなみに少女の話だが、捨てられていたということにしている。

なぜなら俺の勘がオークションのことは黙っていた方が良いと言っているからだ。

しかし、どうしてあんなところに居たんだ？

まさか間違えて紛れたとは考えにくいし。

「お父さんかお母さんはどこにいるか分かるか？」

「???」

首を傾げて不思議そうな顔をする少女

「お父さん？ お母さん？ キーア、そんなの知らないよ」

「キーア、お前の名前はキーアって言うのか」

でも一体、誰があのおークションに――――

「……兄さん」

なんだよゼノヴィア、いま凄く推理中なんだからちょっと待ってくれよ

「まずはその子の格好、どうにかしないといけないと思わないかい？」

「……………あっ」

そうだな、その通りだ。

イツセーがちょっと興奮気味になってるから早くどうにかしないと。

「キーマちゃん、服を着ましようか」

リアスがキーマに近づいて手を伸ばすとキーマはその手を掻い潜って俺に飛びついてくる。

「キーマも旅人の着てる服が良い！」

なにを言いますか。

別に俺は構わないけども、サイズが違いすぎるだろう。

「旅人のと同じが良いの！」

「なら任せなさいキーマちゃん」

お袋、なんか久しぶりな気がするのは俺だけか？

「こんなこともあるかと旅人のお古は取ってあるのよ！！」

流石は母上、先見の眼がヤヴァイだろうwww

数分後、俺の昔の服を着てキーマは戻ってきた。

白のTシャツに短パン

案外、似合っていることに驚いた

「むう、旅人と同じじゃない」

「ははは、拗ねんな拗ねんな」

ちよいと乱暴だが頭をグリグリと撫でまくる

「「……………（ジー）」」

「兄貴の方を凝視してどうしたんだよゼノヴィア、子猫ちゃん？」

「別になんでもない」

「そうです、黙っててください」

イッセーが「子猫ちゃん、まだ俺には兄貴程には懐いてくれてないのね」とか涙を目に溜めてリアスに抱きついていた

「ところでお袋に親父、「「良いよ（わよ）」」まだ内容を言っていない」

「どうせキーアちゃんを家族にしたいとかでしょ？」

「僕たちは大賛成さ、アーシアちゃんに続いてキーアちゃんみたいな可愛い娘が出来るなんて夢のようさ」

「それにキーアちゃんは捨てられてたんでしょ？」

「そうそう、そんな子をまた捨てるなんて人を疑うよ」

あんたら気前良すぎだろ

「でだ、一誠は断るはずがないから意見を聞かないが「確かにそうだけでも、せめて聞いてよ!」……キア、お前はどうしたい?」

スルースキルで一誠を無視してキアに問いかける

人生において、道標などありはしない

いつも方向を決めるのも、歩きだすのも最終的に自分だ。

だからこそ俺はキアに自分で道を決めてもらう

「かぞく?」

「知らないのか?」

「うん」

「そっか……『家族』ってのはな、切っても切れない硬い絆で結ばれてる人達のことだ」

そう考えると一誠や両親だけでなくリアスや朱乃、オカルト部部員は全員が『家族』になるな

「うーんと、旅人とずっと一緒に居れるの?」

「ずっとじゃないけど、一緒に居られるな」

主に俺の仕事のシフトが無い日は

「なら『家族』になる!!」

笑顔で俺にダイブしてくるキーン

おお、懐かれたか、俺？

とにかく、こうしてキーンが家族になったのだった

新しい家族（後書き）

次話こそ、六巻に完全突入

イリナが登場します

紫藤イリナ（前書き）

はい、連続投稿ですW

紫藤イリナ

「えゝ、旅人行っちゃうのゝ」

「ごめんな、キーア」

キーアが家族になり、数時間後

俺はバイトの為に一誠たちよりも早い時間に学校に行かなければならなかった。

「午前中で終わるから午後には帰ってくるよ」

「うゝ」

涙目になり俺の事を上目使いで見ってくるキーア

やべえ、なにこの可愛い生物

「じゃあ、行ってくるから」

「はやく帰ってきてねゝ!!」

任せておけ。

「ふぁふぁふぁ、今度会ってみたいの」

「たぶん会ったら、気道さんも思わず可愛がっちゃいますよ」

校内の掃除をしながら俺は気道さんにキーアの自慢を試してみた。

「しかし、体育祭ですか」

「毎年、皆が熱く戦う祭りじゃ。今年も変わらずに熱気に満ち溢れておる」

確かに、ここ最近の駒王学園は熱気に満ち溢れていた。

と言っても俺はまだ一週間ぐらいしかここに居ないが。

「————うずうずしておるの」

「あ、わかります？」

それでも俺はこういうのが好きだし、参加してみたくはあるな。

「ふぁふぁふぁ！ お主も男子じゃの」

「お恥ずかしい限りです」

「……乱入は止めておくのじゃぞ」

「……はい」

くそっ！

どんだけこの人は先を読んでいるんだ！！

「さて、旅人君。ワシは一階をやるから上の階を任せても良いかの？」

二階から四階まで掃除かよ。

でもまあ、気道さんも歳だし、階段を上がるのも辛そうだし良いか。俺は言われた通り、手始めに四階から掃除して、一階ずつ降りて行く。

三階も終わり、二階を掃除していると声を掛けられた。

「あれ、もしかして旅人さんですか!？」

この時間、もうすぐ朝のHRで生徒は誰も居ないはず。

しかも聞き覚えのある声、先生方の声じゃないけど誰だ？

「きゃー！ やっぱ旅人さんだ!!」

職員室から現れたのは栗毛のツインテールの女子

……まさかこいつは

「ほう、どこの美少女かと思ったらイリナじゃないか」

「美少女だなんて、褒めてもなにも出ませんよ／＼／＼」

ははは、照れやがってこいつ。

懐かしいやつにあったもんだ。

「ん？　　そういやこの制服着てるな」

「そうです、私は今日からこの駒王学園に転入したんです!!」

なぜか胸を張るイリナ

「へえ、なかなか似合ってるぞイリナ」

「へへへえ、そうですか？」

ふむ、昔は男っぽい感じだったがよくもまあここまで女の子らしくなったものだ。

「旅人さんはこの生徒じゃないんですか？」

「おう、俺は中卒だ。今はここで事務員としてバイトしてる」

「ええー、じゃあ旅人さんとイチャつけません」

「くくく、なに言ってやがる」

懐かしいな本当に。

「まあ、俺もここに就職して一週間程度だ。新米同士頑張ろうじゃないか」

「はい、これからよろしくお願いしますね!!」

握手をする俺とイリナ

うむうむ、実に元気な娘でよろしい。

———だが……な。

手を握った時の感覚、北欧の可愛い姉ちゃん達に酌してもらう店に連れてってくれたオーディンとかいう爺さんの部下とかいう——ヴァルキリアだったか？——奴らに近い雰囲気を感じた。

あいつらも人間離れた動きしてきたし、まさかイリナも人外じみた動きとかできるのか？

「……………想像したくないな」

俺は秘かに怖がっていたりしたのだった。

一誠 side

生徒会のメンバーにもイリナは挨拶を済ませ、歓迎会

イリナと俺は久しぶりに話をしていた。

「そういえば、朝のHRの前で旅人さんに会ったわ」

「ああ、じゃあ兄貴のこと聞いた？」

「ええ、出来れば同じ生徒同士が良かったわ」

そうなんだなあ、俺もそれが良かったよ。

「でも旅人さんと同じ学校に居られることに変わりはないわ!!」

「イリナは兄貴によく懐いていたからな」

下手したら俺と遊ぶよりも兄貴に面倒をよく見てもらってたんじゃないか？

だって俺と遊ぶ約束してないのになぜか兄貴と遊んでるし、泊りに来た時だって兄貴とずっとベッタリだったし。

兄貴は兄貴でイリナのこと気に入ってるから面倒を見てたし。

「以前は会えなくて、帰ってから十日十晩寝込んだけども、これも主のお導きよ!」

どんだけ兄貴と会えなかったのが残念だったんだよ!?

神様が死んだって聞かされた時よりも三日三晩長いってどんだけだよ!!

「そ、そんなに兄貴に会えなかったのが悲しかったのか?」

「当たり前じゃない!!」

おおっ、すごい迫力だ。

「私は旅人さんの事がす^{ガシッ}k」

イリナが何かを言いかけたところでゼノヴィアと子猫ちゃんがイリナの肩を掴んだ。

「ちょっとこっちに来てもらえますか？」

「“女として” 大事な話があるんだ」

くっ、なんだこの二人から放たれている禍々しいほどの殺気は

あのアザゼル先生ほどですら冷や汗を滝のように流してるじゃないか！？

「へえ、“女として”？」

「ああ、“女として”だ」

しかしそんな殺気をものともせずに平然としているイリナ

こいつ……出来るぞ！！

ごめんなさい、ぶっちゃけ漏らしそうです。

三人はそのまま外に出て行き、この場には静寂だけが残った。

なんだったんだよ一体？

side out

紫藤イリナ（後書き）

ちなみにですがキアはアジア以上に溺愛されています。

というかキアはアジアからも溺愛されています。

原作アジアが可愛い妹ならばキアは歳の離れた可愛い妹か子煩悩な親（兵藤家&リアスと眷属一同）に愛されている娘といった感じです。

今後、こういう風にキアが成長していくかも知れなくください。

では感想をお待ちしております。

キーア×読書×過保護（前書き）

今回は閑話的なお話です

キーア×読書×過保護

黒歌 side

私は自室のベットに寝転がる

「はぁ……」

あのオークションから数日、私はヴァーリー達の下に戻ってから溜め息が増えた

うう、旅人」

幾らなんでもアレは反則よ

それに久しぶりに会ったっていうのに気絶させることないじゃない

でもそんなことよりも――

「――旅人が生きてたぁ」

その事実が私の中で満ちる

てっきり死んだと思ってたから自暴自棄になってヴァーリーや赤龍帝に子作りとか求めちゃったけど旅人がいるならどうでも良いわ

今度会ったらなにしてもらおうかな？

Side out

「旅人、今日は仕事に行かないの？」

「おう、今日は一日休みだから一緒だぞ」

「やったあああああ！」

そんな喜ばれちまうとこっちもなんだか嬉しいぜ

「あう、羨ましいですお兄ちゃんは」

「まったくね、キアにも一番懐かれてるし」

「ふふふ、こうして見るとまるで仲が良い、歳の離れた兄妹ですわ」

「でも私としてはキアの方が羨ましいです」

「激しく同意だな」

女性陣はこんな感じ

「義兄さん……子供にモテるんだね」

「凄く懐かれますね」

「きっと精神年齢が同じぐら……ゴホン、兄貴は純粹だからじゃないか？」

これが男性陣の反応

アザゼルはあれでも一応は教師なので先に家を出て

てか、あいつは家に来てない。

「ほら、お前ら。早く行かないと遅刻するぞ？」

「そうね……みんな行きましょう」

リアスの号令の下、それぞれが挨拶をして外に出ていく

「行ってらっしゃーい！」

みんなを見送るキーア

その姿にリアス達全員が頬を緩ませる

まだ家に来て一週間が経ってないのに好かれてるな、とても良いことだ。

さて、みんなが行ったことだし俺はキーアに勉強させるかな。

あつ、勉強って言っても学校とかで習う勉強じゃなくて遊びとか生活面についての方の勉強ね。

「旅人、本読もう！」

キーアは本が好きみたいで、よく俺と一緒に図書館とかから本を借りては読んでいる。

本が好きだと発覚した理由はつい二日目にまで遡る。

その日は珍しく、キーアと俺とリアスだけしか家に居なかった。

しかも俺達は家の中で一番キーアを可愛がっている二人で、その日もキーアに癒されていた。

「ねえ、旅人」

「なんだよ？」

「キーアってば可愛いわね」

「可愛いな」

「お持ち帰りしたいわ」

「ここは俺達の家だけど、気持ちわかるぜ」

俺達のはこっそりと二人でリビングの入り口から隠れて中を覗いていた。

「んゝ、取れないゝ」

冷蔵庫の上の方にあるプリンを取ろうと背伸びをしているのだが背が届かず、取れないキーア

その後ろ姿に俺達は『萌え』を感じていた。

「あ、そうだ！」

なにかに気付いたようで、キアは椅子を持ってきてその上に乗った。

「取れたあ!!」

「「おおー！（ボソツ）」

やっぱり賢いな、キアは

プリンを食べて幸せそうにするキアも見れたし、そろそろ俺達も出て行くかな。

「あ、旅人にリアス、おはよう」

「おはよう、キア」

「美味しそうなもの食べてるわね」

「うん、とってもおいしいよ!!」

にこっ、と笑うキア

「「くっ!!」」

俺とリアスが仰け反る

駄目だ、破壊力があり過ぎる!!

「もう駄目、我慢できない!!」

リアスが我慢できずにキーアに抱きつく

あの豊満な胸に挟まれたキーアは苦しそうにジタバタしている。

「これこれリアスさんや、気持ちは分かるがキーアが死にかけてるから」

ジタバタする力が弱くなってきてグッタリし始めてるし

「ご、ごめんなさい」

まったく羨ましいなキーアめ

「ねえねえ、旅人」

解放されたキーアが俺に近づいてきて話し掛けてきた

「どうした？」

「んとね、机の上にある本に出てきたんだけど本当に妖精さんっているのかな？」

おお、なんとという輝いた目をしているんだ

「居るぞ、きつと可愛い奴らなんだろうな」

「ええ、そうよ」

なぜかは知らんがリアスの言葉に凄い説得力がある。

「そっかあ、でも本に出てきた妖精さんは可愛いつて感じじゃなかったよ？」

それはまた珍しい

「キーマは本が読めるんだな」

「うん、好きだよ……ふあゝ」

おっと、どうやらお腹いっぱいになって眠くなったようだな。

「ほら、キーマ」

俺はキーマを抱き上げるとすぐに俺の腕の中で丸まって寝てしまった。

しかし、机の上にある本？

何の本だろうか？

「ねえ、旅人……これって」

俺がキーマを膝枕するためにソファに座るとリアスが横に座ってきて本を見せてきた。

「……おいおい、真剣^{マキマキ}かよ？」

リアスが見せてきた本、それはシェークスピアの『夏の夜の夢』だった

「妖精って『妖精の女王』^{タイターニア}のことかよ、それなら確かに可愛いって印象は受けないな

リアスも苦笑いしている、こんな難しい本を読んだのかよキーアは

「下手したら一誠よりも頭が良いんじゃないか？」

「少なくとも内容とかは理解しているみたいだから、そう言う点では一誠よりも上よね」

この眠っているお姫様は俺達の予想よりも賢いようだ。

ってなことがありまして、現在

難しすぎるのは俺が参ってしまうので軽めの物を読んであげた

その後に、キーアを昼寝させて起きたらテレビを見るという平和な日だった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

帰って来たオカルト部連中

本場とギヤスパーは帰り道の途中で家に帰ったらしく居ない。

アザゼルは残業だそうだ。

「今日は部活動は良いのか？」

「今日は休みなんだよ」

てっきり今日もイッセーが学校でハーレムを楽しんでくるのかと思
ったら違ったみたいだ。

そんなこんなな一日だった。

そしてこれが、全てが始まる前の最後の日であったのだった。

キーア×読書×過保護（後書き）

次回、アジアのストーカー現る

感想をお待ちしております

ディオドラ・アスタロト（前書き）

みなさん、おはこんばんは

今回の話を書いてて思った

ディオドラって……どんなやつだっけ？

六巻を見直せばいいのに見直さずにイメージで書いてしまったorz

間違えてたら教えてください。

では、本編へどうぞ

ディオドラ・アスタロト

仕事が終わわり、一誠達と一緒に帰る

今日は部活がないらしく家でビデオでも見るらしい

話を聞く限り、俺の興味無さそうな内容のビデオなのでキーアと遊ぶことにした

「……お袋とお出かけ中とは参ったぜ」

ちくせう、みんなして俺を一人にしたいのかよ

とりあえず飯でも作って一人で食べてやる

カップラーメンだけどね

一人寂しくラーメンを食べ終わる頃、なんだか二階が騒がしくなってきた

なんだよ、ビデオがそんなに楽しいのか？

段々と見に行きたくなってきた

でも今更『気になるから俺も観せて』とは恥ずかしい

だから俺は麦茶を皆に配りに来たという名目で行くことにした

ふふふ、どうよこの完璧な作戦は

満を持して一誠の部屋の扉をノックする

「みんな、麦茶を持って来たぞ」

『へ？ あ、ちょっと待って兄貴!!』

一誠が何か言っているが無視して扉を開ける

すると中には金髪のイケメンがアーシアにビンタされていた

アーシアがビンタするとは珍しい

「私について行きません」

「案外、我が俣だね君は」

それでもアーシアの腕を離さない金髪

「おい、金髪」

「……誰だい君は？」

ニッコリとした表情で俺を見てくる金髪

「俺はそいつの義兄ちゃんだよ」

「へえ、その義兄が何の用だい？」

「なになって……義妹が困ってるからその腕を離しな」

「見たところただの人間のようにだが……君が僕に命令かい？」

ほう、こいつ

こいつの目、腐ってる人間がしている目だ

上手く態度では隠せているが甘いな

「少し黙っていてはくれないか？　僕は今、アーシアと話しているんだ」

濃厚な殺気、反射的に一誠達が身構える

「兄貴、下がって！」

だから俺はそんな一誠たちを手で制して、そして――

リアス side

「少し黙っていてはくれないか？　僕は今、アーシアと話しているんだ」

濃厚な殺気、反射的に私達は身構える

「兄貴、下がって！」

相手は上級悪魔のディオドラ・アスタロト

ベルゼブブの家柄の悪魔、さっき見たビデオやこの殺気からも分かるようにとても強い相手よ

旅人みたいに普通の人間が勝てる相手じゃ――――

しかし旅人は私達を手で制して

「俺はその手を離せと言っているんだが？」

そう旅人が言った瞬間、ディオドラ・アスタロトの上半身が肉片となった。

いや、実際にはなっていない。

旅人が発した殺気だけで私はその幻覚を見せられたのだ。

「う、ああ、うううう」

身体が震えるて立ってることすらも辛い

心なしか息もしにくい。

「貴様が何者かは知らんが、俺の義妹に手を出した挙句、この家でそんな殺気を放ったんだ。本当ならここで死刑にするとところだが……みんなの手前だ、見逃してやるから帰れ」

コクコクと頷くディオドラ・アスタロト

私達ですらこんな状態なのに、殺気に向けられた本人はどんな感じなのでしょうね？

想像もしたくはないわ。

「一誠、玄関まで見送ってやれ」

「お、おう」

イッセーもなんとかよろよろになりながらも立ちあがる。

「ほら、はやく行け」

急かす旅人、ディオドラ・アスタロトが家を出て行ったことを確認するとアジアに近づいて

「ごめんな、怖い思いさせちゃって」

そっと抱きしめた。

「――――あ」

「大丈夫だ、心配しなくていい。もしもあいつが無理やり次に何かしてきたら俺が殴り飛ばしてやるから」

髪を撫でながら安心させるように囁く旅人

「今は眠りな」

緊張が解けたせいかな、アーシアは眠ってしまった。

「いやあ、やっちゃったな」

頭を掻きながら旅人は言う

「ごめんな皆も、俺はここので退散することにするわ」

アーシアをベットに寝かせて逃げるように退散する旅人

……なんだったのよ今のは

この時、私達は旅人の嘘のような武勇伝が本当のことだと確信しかけたのだった。

s i d e o u t

ディオドラ・アスタロト（後書き）

リアスたちがレーティングゲームのビデオを家で見たのはこの作品の設定上、意図的にやったものです。

確か、部室で見たような気がしてたんですね。

……とりあえず、もう一度六巻を読んできた方が良さそうだ。

感想お待ちしております。

キーアの力の片鱗（前書き）

どうも、お久しぶりです。

更新が遅れて申し訳ありません。

今回は日常編

どの物語でもそうなのですが、この一章編では伏線をせっせと張り続けていきます。

それを踏まえたうえで、本編をお読みください。

キアの力の片鱗

くそ……ライザーの野郎、電話しても繋がらないじゃんか

ディオドラだっけか？

そいつが家に来たことを一応は報告しようとしたのだが電話にでない
なんか忙しいのだろうか？

そういえばアイツの家ってなんでも治るとかいいう傷薬を売ってると
か言ってたっけ……

「まあ、今度でいっか」

どうせ急ぐことでもないし

「なにが良いの？」

俺の膝に座って一緒にテレビを見るキアが聞いてきた

「なんでもないよ」

そういやキアのことだが、あのオークションになぜ居たのか未だ
に不明だ

両親を覚えていなかったが、お袋の話によれば車の存在は知っていたらしい

一般常識程度の知識は覚えているのか？

でもそれなら両親を覚えていても可笑しくはない

キーアが嘘をつくとも思えないし……

よくわからんな

そういう専門的な話は専門家に聞くのが一番か

今度一緒に病院に行こうかな？

「このお料理美味しそうだね」

「ん？ ああ、パスタのことか」

カルボナーラを美味しそうに食べるリポーター

確かに食いたいな

「キーアも作ってみたい！！」

「……………え？」

流石に晩飯はちゃんとした物が食べたい

悪いけど明日の昼に作ってもらおう————

「だめ？（うるうる）」

「今日の夜ご飯が楽しみだな!!」

ごめん、みんな

俺にはキアのお願いを断る力はないんだよ

ということがあり、夕飯の準備にとりかかる頃

「……なんでお前らが居るの？」

なぜか食卓には木場とギヤスパーとアザゼルが居た

「「キア（ちゃん）がカルボナーラを作ると聞きました」「」

食材足りるかな？

そんなことがあり現在、下ごしらえは俺がして後は俺が教えながらキアが作ることにした。

「キア、フライパン持てるか？」

「大丈夫だよ!!」

「じゃあまずは麺を茹でようか」

パスタ作りにおいて、この麺の茹で時間は実は重要で、ここでパス

タの良し悪しが決まると俺は思っている。

「んじゃ、キーア作って――――」

俺はキーアの方を向くとそこには何かに集中しているキーアが居た

「――――行くよ」

瞬間、キーアの全身が青白く光り出した。

「なっ!？」

なんだよこれ？

仙術？

でも黒歌が使うときみたいな気配は感じない

俺が驚いている間にもキーアは手慣れた動きでパスタを作って行き、盛り付けまで終わらせた。

「出来た!!」

「……………」

満面の笑みで喜ぶキーア

おいおい、どうやらあのオークションで見つけてきた娘は結構な謎の塊らしいぞ。

記憶喪失、闇のオークション、不思議な能力

この三つのキーワードだけでも怪しさ満点だけでも、まだなにかありそうなんだよな。

「旅人、はやく食べよう!!」

でもまあ、別に良いか。

何が起こったとしても、なるようになるさ。

この時、キアが俺という物語を加速させていく重要なファクターになるとは思いもしなかった。

キーアの力の片鱗（後書き）

次回『キーア、ラーメン屋に行く』です

なんとこの作品でヤラレ役のあの白い人も登場します！？

ラーメン屋（前書き）

とりあえず、こんな感じでどうでしょうか？

ラーメン屋

深夜、キーマが寝てから俺は家を出る

一誠達はまだ帰ってきていない

まあ、高校生だし色々あるのだろう

それにあの面子が誘拐されるとかも無さそうだし心配はしてない

でだ、今回の目的はなんだが急にラーメンが食べたくなくなって来たので、近くにあるという最近評判のラーメン屋に行くことだ

流石にキーマをこの時間に外に連れて行くのは駄目だから一人だ
今からラーメンが楽しみである

リアス side

「しかし……ヴァーリーがねえ」

アザゼルが染々と呟く

「ラーメン屋に行くそうですよ？」

「敵陣のど真ん中だって言うのに暢気ね」

本当なら倒しに行きたいけどヴァーリーはイツセーの相手

私が手を出すわけにはいかないわ

「でも暴れたりしたらどうしますか」

木場が真剣な表情でアザゼルに聞く

それに私達も真剣な表情で考える

「あ、それなら大丈夫だぜ」

でもそんな中でイツセーだけがまったりとお茶をしながら答える

ああ、そうだったわね

この街には旅人が居る

人間の中でも最上級の部類に入る強さの持ち主

でも所詮は人間

この前のヴァーリーを吹き飛ばしたのだって偶然でしょう……でも旅人が居るならなんとかなりそうな気がするわね

本当に不思議な男

イツセー……赤龍帝の兄だからかしら？

「とにかくよ、ヴァーリー達も簡単には暴れられないはずだけど一応は警戒しておきましょう」

『はい!』

Side out

時間帯のせいか噂の行列はなく、スナリと席に案内された
実際は行列は無いが中は人が沢山居てカウンター席しか空いて無か
ったから純粹に運が良かったのだろう

俺は席に座り、評判の鶏ガラをベースとした魚介ラーメンを頼む

「お、兄ちゃんも噂を聞いて来たクチかい？」

ラーメンを待っていると隣から話しかけられて見ると、猿顔の男が居た

「そういうアンタもか？」

「まあな、連れと一緒に来てるんだ」

男の隣の席は空席

トイレだろうか？

「しかしまあ、随分とアンタも暢気だよな」

「んあ？　　どういことだよ？」

俺が尋ねると同時にラーメンが“俺の前に”出される

「アンタは自分の世界への影響力を知らなさすぎるんだよ“兵藤旅
人”」

そう言った瞬間、店の中に居た人達が一斉に立ち上がり俺に向かって銃や刃物、挙げ句の果てには魔力を込めた掌まで向けてきた

「へえ……美味しそうなラーメンだ」

しかしそんなことに興味がない俺はラーメンを啜った

おお、美味しいなこのラーメン

「結構余裕そうじゃねえの」

「まあな」

こんなこと旅先で何回もあったしな

「で、お前達は何者さ？」

「俺っちは禍の団さ」

……………なんだっけ、それ？

「アンタを捕まえて帰らなきゃ黒歌とオフィスにボロクソにされちまうんだ、大人しく一緒に来てくれ」

そうだそうだ、あの二人が所属してる組織だ

「あの二人はなんか俺に対して言ってたか？」

「オフィスは『絶対に逃がさん』って言ってる、黒歌は『絶対に

捕まえてやる』だよ」

マジか、結局どっちも俺を捕まえる気じゃん

「なあ、頼むから一緒に来てくれよ」

「だが断る」

黒歌が居るのは魅力的だが俺は誰かを従える気も誰かに従う気も無い俺に命令できるのは俺だけだ

「そう言うと思ったぜい、だから手荒に連行させてもらう!!」

その言葉と共に一斉に全方位から魔力弾が飛来する

仕方がねえな

「ハアアアッ!!」

肺から空気を思いきりだして、それによって発生した衝撃波で魔力弾を全て掻き消す

「……おいおい、本当に人間かよアンタ？」

「ああ、正真正銘の人間さ」

技のせいで周囲の物が結構吹き飛んでしまった、もちろんラーメンは守りきった

「だから言っただろう、その程度ではその男を捕獲するどころか攻撃を当てることすら叶わんと」

店の入口から入って来たのは白い鎧の奴

「言ってたけど普通は信じられねえよ」

「まあ、それはそうだろうな」

なんか向こうだけで勝手に話が進んでる

「さて、ラーメンも食い終わったし帰るか」

明日はバイトだしな

「逃がさんぞ」

また体が重くなった、ダルいぞ

「全員、手加減なんぞするなよ。突撃！！」

一斉に迫ってくる敵

さっきの技は声が渴れるし……しょうがない

「吹き飛ばや！」

近くにあった机を掴んでそれで思いきり殴りつけると目の前に道が開いた

よし逃げよう

「逃がさんZ「テメエは邪魔だ白いの!!」ぐぼらあ!？」

いきなり目の前に出てきた白いのを殴り飛ばす

てか、相変わらず弱いな

その後、俺は二時間も追いかけてなんとか逃げ切ったのだった。

グレモリーside

「……なにがあったのかしら？」

魔力を感じてやってくれば、なんかすごく嚴重な結界が張っており

破って中に入ると、最近評判だったラーメン屋さん一帯がクレーターが出来ていたりした。

幸いなことに建物とかは被害がなかったみたいだけでも

ふう、これも禍の団の攻撃なのかしら？

頭を抱えるリアスであった。

side out

ラーメン屋（後書き）

ヴァーリーの扱いが酷過ぎたかw？

とりあえずは次話で物語が進みます。

真なる赤龍神帝（前書き）

お久しぶりです。

今回はイッセーが覇龍に目覚める日の早朝からのお話です

つまりあの方が出てきます

真なる赤龍神帝

あの襲撃から数日が経過した

学園は明後日に行われる体育祭の練習で活気に溢れている

そんな中、清掃を一通り終わらせた俺は校庭を眺めていた

まともに高校に行っていない俺はこうして青春をしている皆が輝いて見える

本当に眩しすぎて目を瞑ってしまいたいぐらいだ

後悔はしていない……と言えは嘘になる

だがしかし、俺は俺が『兵藤旅人』という物語の主人公であり

学園生活を捨てても旅に出なければならぬ理由があった

だからこそ、学園生活に憧れはあるのだがな

そして、話しは変わるが俺はある予感がしている

俺の宿敵との再戦の予感

間違いなく世界最強の一角

あの真紅の竜との決戦が近づいているのがなんとなくだが分かる

「じゃあねえな、いつちよやるか」

さあ、バイトの時間ももうすぐ終りだ

“もうすぐ行くぜ”……真紅の竜よ

翌日、日も登って居ないほど早い時間

兵藤家の前には一台のバイクに跨がる一人の少年の姿があった

（書き置きは置いてきた。親父やお袋のことも一誠たちに任せれば良い、キーマも皆が居れば寂しくはないだろう）

ヘルメットを被り、エンジンをかける

「さあ、行くか！」

向かった場所とはある街外れにある廃虚

その場所に我が親友であるライザー・フェニックスが居た

「まったく貴様というやつはいきなり電話をしてきたと思ったら……本気であそこに行く気か？」

呆れた表情で出迎えられ、真剣な表情で問われる

「ああ……前回の決着を付けなきゃならん」

「……そうか」

目を瞑り、何かを考えるライザー

「今回のことはフェニックス家ではなく友として貴様の手伝いに来た……本当は止めさせたいが無駄なのだろう？」

「当たり前だ、俺に命令できるのは俺だけだ」

「ならばよろしい、必ず生きて帰れよ」

「ああ、また一緒に釣りに行こう」

俺とライザーは拳と拳を合わせて約束をする

「では、また会おう、友よ!!」

ライザーがそう叫ぶと共に俺の足下に魔方陣が現れ、世界を光で包み込む

光が収まるとそこはなにもない空間だった

上を見上げる

すると真紅の空があった

俺は思いきり息を吸って

[illegible]

真紅の空が離れて動きその正体をあらわにする

『随分と早かったな旅人よ』

真なる赤龍神帝

それが俺がライザーから聞いたグレードレッドの名だ

随分と大層な名前だぜ

「約束を早めに果たすのは別に悪いことじゃないだろう？」

『まあな、貴様が来なかったら明日にでも我が出向くつもりであつた』

ははは、なら良かった

あつちでこいつが暴れたら被害は甚大だろうしな

『では貴様とお喋りはもういらんだらう』

「ああ、後は拳で語り合おう」

俺は構える

「参る！」

グレードレッドの突撃と俺の拳が激突し、そこを中心に大規模な衝撃波が生まれるのであった

真なる赤龍神帝（後書き）

もう一話、同日投稿します

超越者 VS 真なる赤龍神帝（前書き）

ふう、グダっちまったか？

とにかく、グレードレッドとの戦いは早めに切り上げます。

原作の六巻はまだこの物語のオープニングですのでねw

超越者 vs 真なる赤龍神帝

「だらし あああああああああああああ!!」

グレードレッドの身体と拳がぶつかり互いに怯む

一瞬早く体勢を立て直した旅人は蹴りを放つ

それは普通なら当たるだろう

だが相手は決して“普通”の相手では無かった

蹴りが当たる直前でグレードレッドは“掻き消えた”

掻き消える否や旅人は身体をひねって後ろに裏拳を放つ

ドコンッ!!

その裏拳はいつの間にか後ろから尻ぎ払いに来ていたグレードレッドの巨大な尻尾と当たる

威力は互いに互角であった

直ぐ様グレードレッドは上空へと飛翔し無数の火球を放つ

なにもない空間において人間が足で移動するのは不可能

この無重力の世界において旅人がグレードレッドの火球を回避する方法は皆無——のように思えた

旅人は“なにもない空間を蹴り、高速で移動する”

それはこの無重力という条件下だからこそできる技であり、同時に人間には不可能なはずの技

やったことは単純明快

“ 空気の面を蹴って進んだだけ ”

そう、それだけなのだ

そして旅人は先ほどの火球のお返しとばかりに拳で空気の面をラッシュする

ラッシュにより空気の面は押しつぶされ圧縮された空気は前方にプラズマとして放たれた

プラズマ光線の弾幕

その弾幕の中を潜り抜けるようにグレードレッドは旋回を駆使して高速で抜けていく

刹那——音速をも超える、まるで閃光^{レーザー}のような光速の火球による逃れようのない死の弾幕が、旅人へ向けて放たれる。

グレードレッドはその攻撃（弾幕）が、必殺である事を信じて疑わない。

二戦目で旅人のことを小さき者と侮る訳はないのだが数千年生きてきたグレードレッドの中にある“常識”がそうした

そしてなにより、放った一撃（弾幕）はまさに回避不能の光速の火故に、その弾幕は文字通りの必中にして必殺——！

『————ッ！？』

されどその必殺の弾幕（一撃）は、目の前の相手には何の意味も成さないものだった。

なぜなら彼もまた、ただの人の身において人智を越え、神をも超える者らと同等の力をもつ存在——『超越者^{バケモノ}』なのだから……！

「————じゃあな」

旅人は一瞬でグレードレッドの顔の真横まで近づきプラズマを高密度に突貫力を最大限にするように放つ

そして、勝利の確信と言う名の慢心は、戦場において最も致命的な隙を生み出す魔物

故に、本来であればこの一撃で、勝敗は決していただろう

「……！」

その絶望的にして刹那の隙を狙われ、生き延びられたのはひとえにグレードレッドの強者としての経験のお陰だった

「……俺の一撃を受けて無傷……だと？」

『ぐっ……』

グレードレッドは瞬時に己の魔力を薄く超高密度に膜のように張った瞬間的全方位絶対防御

膜を越えるには張った分の魔力を超える攻撃を放つぐらいしかない
グレードレッドとはいえども膨大な魔力を消費するこの方法はそう
何度まできはしない

旅人は攻撃が通らなかったことを脳が理解するや否や反射的に距離
を取ろうとする。

その反応は決して遅いものではなく、人間の反射神経としては限り
なく素早い反応だとは言えた

『やはりありえぬ……無茶苦茶すぎなのだ!!』

光速の火球の弾幕を潜り抜け、なおかつ自分の眼前へと近づく己の
理解を超越する人間を前に、グレードレッドは、その思考を全力で
回転させる。

だが、グレードレッドが動揺するのも無理はない

彼の生きてきた数千年の常識が、目の前に存在する一人の少年によ
って覆されたのだから—————！

グレートレッドは数回、深呼吸をして落ち着かせる

『くくっ……光をかわすなどと、ありえんのだが』

そう。

銃弾や閃光を避けるなんて芸当は、人間の抱く“空想”の中だけ……

そんな幻想を、彼はいとも簡単に体現してみせたのだ。

『神器も持っておらず、魔法の類の力も使えない……ただの人間がなぜその“力”を会得している！？』

グレートレッドは旅人の素早さに一つ、心当たりがあった。

「……俺にも譲れないものがあった、それを守りぬくためには力が必要だったんだよ」

『しかし我が知る限り、そうなった者は長くはないし、最後は酷い者ばかりだぞ？』

「知ってるよ……でも俺はもう決断しちまったんだ」

『……………そうか』

動き出す二人

高速で移動しながら牽制をして、仕掛けるタイミングを測っていた

最初に仕掛けたのはグレートレッド

弾幕を再び、先程よりも濃く張り、それでも足りないと思っていたグレートレッドは牽制の合間に数万の火球を放つ

正面から放つのでは幾ら数万の火球とはいえ回避される、放った直後に高速で移動をして上空から、そして下空から攻撃を放つ

そしてそこは完全に旅人の死角となっていた。

光速を誇る十万近い攻撃の前に、いかに『超越者』でもこの波状攻撃を無傷で逃れられるはずもない。

三方向から迫る光の如き業火の旋風を前に、逃れる術など存在しない……！

「――――『瞬間超神速転移換装』――――！」

『え……？』

―――にもかかわらず。

二度目の必殺を確信したグレートレッドの攻撃は、されど前回と同様に、視界に捉えられない神速の動きにより、無に帰されてしまう。

「前回に言わなかったか？ 直線的な攻撃では俺を捉えることは至難の技だと」

―――『瞬間超神速転移換装』―――

それは大昔、神話大戦の頃

まだ人間が神に戦いを挑んでいた時代に『魔力魔術兵装』エイン・フエリアと呼ばれていた戦闘技術だとは旅人は知る由もない。

完全なる独学にして、亜流ではあるがかつての神話大戦における究極の戦闘体術マッシュアル・アーツを習得していたのだ。

才能だけではなく、常軌を逸した戦闘経験と、努力の賜物であった。

一秒にも満たない瞬間に限定し、己の魔力を爆発的に高め

自らの身体へと取り込み、固定することで自分自身を弾丸にするという、一時的な身体能力の強化

己の肉体の限界を遥かに超えた運動性能を、自らとどうかさせた魔力を爆発することで生み出すという、神技

その膨大な魔力は、時空間すら歪めるほどの絶大な戦闘能力を生み出すのである。

そんな技を旅人は“魔力無しでやってのけた”

当然のことながら、代わりに違うものを消費した

それは体力や生命力を燃やすことで生まれる

ただし生命力は体力がなくなって来た時に使うのだが……

それでも彼の足に瞬間的に集められる“それ”は、音速を超え、光速をも凌駕する！

超越者 対 真なる赤龍神帝

勝負はまだまだ続くのであった。

超越者 VS 真なる赤龍神帝（後書き）

さてさて、どうでしたでしょうか？

今回のお話を見てお気づきの方もいるかもしれませんが自分はフォルテシモというゲームが大好きです

そして旅人が使った技は原作と消費するエネルギーが違うので名前を変えさせていただきました

今回の戦闘描写は自分が執筆している『その男、孤独の戦士なり』でも引用させていただくかもしれませんのでご容赦くださいませ。

感想お待ちしております

激闘、終了（前書き）

おいおい、まだ一話しかやってないのにグレートレッド編の終わるかよ

……まあ、まだ一応はプロローグ扱いですしねWWW

激闘、終了

悪魔 side

「私の望みは平穏な世界」

オフィスはレーティングゲームの観戦にきた面々を前にそう言った

「おいおい、ホームシックかよ」

それに対してアザゼルはやれやれと言った表情で答える

「……だが私の一番の望みは違う」

「なんだと？」

「私の一番の望みはとある男だ」

「男だあ？」

アザゼルだけでなくオフィスという存在を知っている全員が驚いた

オフィスはチラリとヴァーリを見て、ヴァーリはそれに反応して
なにもない空間にモニターを出現させる

するとそこには真紅の竜と一人の少年がいた

Side out

三人称 side

竜は身体中の肉を抉られ血を流しており呼吸が荒くボロボロだったが一方で少年の方も満身創痍であった

左腕は千切り取られかけ、身体の右半身は焼け焦げている

『……よくぞここまで戦い抜いた、人の子よ』

「はぁ……はぁ……はぁ……」

血を流して朦朧としながらも竜の前に立つ少年

『人の身にありながら我をここまで追い詰めるなどとはな……神や魔王でも出来んことだ』

そう言うグレードレッド

それは素直に目の前にいる人間への賞賛であり、自分への強がりであった

気を抜けば意識が飛ぶという確信があるからこそその強がり

絶対強者としての誇りが今のグレードレッドを支えていた

「カカカ……そうかい……そうかい」

心底楽しそうにそう呟く旅人

「……しかし、よう……お前、は、まだ分かって……無いようだな」

旅人は息も絶え絶えにしながら前を見据える

「忘れたか？ 真なる赤龍神帝、グレードレッドよ」

血へドを吐き出しながら一歩、また一歩とグレードレッドに近づく旅人

そして

「ならば次こそは忘れるな。俺の名は兵藤旅人、超越者など仰々しいものではなく、ただの自由を求める人間だ！！」

最後の力を振り絞って頭突きを喰らわせる旅人

しかしそれはダメージにならないことは百も承知であった

「二度目も互いに闘う力は残ってねえから引き分けみたいだ」

『ああ、そのようだ』

事実、こうして二人は言葉を語り合うことですらギリギリの状態である

「……約束だ、三度目は無えぞ！！」

『ふっ、その台詞、そのまま返してやろう』

旅人の身体が光に包まれ徐々に消えていく

そして旅人は完全に光に溶けて消えた

S i d e o u t

ここはどこだ？

周りから悲鳴が聞こえてくる

俯せだから何も分からない

なんとか這いずって壁際まで辿り着き、壁に寄りかかった

「ちっ、マジでヤバイみてえだな」

身体に力が入らなくなってきた

「あ、兄貴！」

「ん？ おお、一誠か」

「なんで兄貴がアイツと闘ってたんだよ！？」

「……見てたのか？」

ハハハ、参ったねこりゃあ

「久しい、旅人」

オフィス……お前まで居るのか

「数週間振りだな……ははは、悪いな、こんな死にかけ状態で」

目まで霞んで来やがった

「単刀直入に言う、助かる方法がある」

ほう？

「我のものになれば、我の蛇を体内に入れば身体 of 自然治癒能力も上がり、我の治療も間に合う」

「ま、待ちなさい!!」

オフィスの言葉に過敏に反応したのは三対の白い羽を生やした天使だった

「テロリスト集団の一員になるのは見過ごせません、彼は私たち天使が身を引き取ります」

「おいおい、あいつは俺のダチだぜ？ 俺たち墮天使が引き取る」

「それなら彼はリアスの眷属の兄だよ？ 僕たち悪魔が引き取ろう」

ごちゃごちゃ、うるせえよ

俺は人間だ

どこにも引き取られるつもりは無い

と言ってもこのままじゃ死んじゃう

どうするか？

こんな時に、なんかゲームみたいにチート級の回復アイテムがあれば……

「ん？　そういや」

震える手でポケットを漁る

あったあった

ポケットから小瓶を取り出す

あんなだけの戦闘をして割れてないなんて凄いな

なんだっけかこれ？

フェニックスの涙だっけ？

ライザー曰く、どんな傷にも効く凄い飲み薬だって言ってたな

胡散臭いが飲ま無いよりはましだろう

一口で全て飲みきる

すると

「お、おお!？」

千切れかけていた腕がみるみる内に治り、傷も瞬間的に治癒される

「ハハハ! ヤベエな、マジでチートアイテムじゃねえか!！」

ライザーの野郎、マジで感謝するぜ

「兄貴（兄さん、お兄さん）!!」

「ぐぼっ!？」

完全復活で喜んでいるところに大勢でタックルを食らった

しかも全方位から

衝撃の逃げ場はなく、モロに俺へとダメージが来る

いや、嬉しいんだけど体力は回復してないからさ

わんわんと泣きつかれながら俺は困っているとリアスと朱野がやってきた

「あらあら、みんなは旅人君が元気になって凄く嬉しいようですね」

「まったく……旅人、相当な無茶をしたわね」

二人ともどうやら俺に呆れているようだ

「ガハハ！　ちよいと命懸けの喧嘩をしてきただけだよ」

「相手が問題なのよ。仮にも世界最強の一角よ？」

「ドラゴンだし強いのは当たり前だろ？」

どこの伝説やお伽噺でもドラゴンは最強の存在だしな

「私が言いたいのはそういうことじゃないのだけど……まあ良いわ、旅人だし」

「そうですね、旅人君ですし」

なんかわからないけど馬鹿にされてる？

「まあ、別に良いや……帰ろう」

そうやって今回の一件は幕を閉じ――――

「逃がさない、旅人」

「逃して頂戴な！！」

回り込んできたオフィスに背を向けて全力で走り出す

「疲れているのだろうか？　私の胸で休むと良い」

「非常に魅力的な提案だが、それだと俺が洗脳されるんだろう！？」

「……………そんなことしない」

「随分と長い間だな!？」

クソツタレが、疲れてるってのによ

「誰か助けてくれよおおおおおおおおおおお!！」

後日談ではあるが、旅人は世界中の勢力から“要注意人物”として扱われることになったのは言うまでもない。

激闘、終了（後書き）

感想をお待ちしております

とある昼下がりにて（前書き）

はい、お久しぶりです。

今回から原作7巻に突入します

それと並行して、『旅人』オリジナルストーリーも進行していこうかと……

では本編にどうぞ！

とある昼下がりにて

「ねえねえ、旅人」

「なんだ、キアア？」

グレードレッドとの戦いからしばらくが経ち、俺はいつも通りの日常を過ごしていた

「旅人ってリアス達みたいに魔法を使えないの？」

……魔法ねえ

あの日、リアスや一誠たちが悪魔であると知った時は驚いたものだがその後、キアアにもなぜか知られてしまいリアスたちは魔法を披露した

本が好きなキアアにはお伽噺に出てくる人物のように思えたのだろう

「ごめんよ、俺はただの人間なんだ。魔法なんて摩訶不思議な技が使えないんだ、だからそんな期待に満ちた純粋な目で見ないでおくれ」

心が痛くなるから

「ええ……まあ、良いか！」

ポスツと俺の胸に飛び込んでくるキアア

「ははは、ありがとな」

魔法……か

確かに俺は魔法は使えないな

「知ってるかキーマ、世界には色んな力があるんだぞ」

「魔法だけじゃないの？」

「魔法ってのがリアス達が使ってるのを言うんだったら違うな」

あいつらが使うのは“魔法”だ

「でもまあ、呼び方が違うだけで殆ど同じようなものだけだな」

「ふーん」

さてと、そろそろ飯でも作りに行きますかね

『ふはははは！ ついに貴様の最後だ、乳龍帝よ！』

学園から帰って来た一誠たちと一緒に俺達は魔界から送られてきたDVDを見ることがになった。

だが――――

『何を！ この乳龍帝が貴様ら闇の軍団に負けるはずがない！ 行くぞ！ 禁手化！』

一誠そっくりの人物が変身を遂げる

これが今の魔界の子供たちの間で大人気らしい。

ええ〜……なんか兄としては弟がこんなことやってるなんて複雑だわ〜。

しかもライザーの話によるとグッズも出ているらしくて、この著作権とかを仕切っているリアスの家は相当稼げているとか。

ははは、なんじゃそりゃ？

『いくぞ、邪悪な怪人よ！ とおっ！ ドラゴンキイイイイックッ！』

鎧を着た『おっぱいドラゴン』が怪人に見事な必殺技を決める。

爆発とか派手な演出までもが行なわれていた。

その後、敵の新兵器でピンチになった主人公だが、そこでヒロインの登場だ。

『おっぱいドラゴン！ 来たわよ！』

登場したのはドレスを着たリアスだった。

当然、本物ではなく、リアスによく似た背格好の役者さんにリアス

の顔を加工している。

『おおっ！ スイッチ姫！ これで勝てる！』

『おっぱいドラゴン』がスイッチ姫のおっぱいを突く

これはアカン！

キアの眼を慌てて手で隠す

「どうしたの旅人、これじゃあ手で見れないよ」

「良いんだ、キアにはまだ早いから」

キアの教育上、これはアカン

個人的には大好きなのだが……出来るならこのテレビはキアの居ないところで見てほしい。

今度ライザーに焼き増ししてもらおう、絶対に。

そして俺の夜のお供にするのだ。

「キア、一緒に上で遊ぼうか？」

「ん〜と……分かった!!」

流石はキア、物わかりがよろしい

その後、鑑賞会が終わったのか一誠達も戻ってきて一緒に遊んだ

バイトの後片付けが終わり、夕暮れ

俺は何者かに尾けられていた

姿は見せてないが気配だけじゃなくて敵意や殺気、監視するもの特有の視線

それら等が隠しきれていない

または誘っているのか？

だとしたら乗ってみるのも一興か……

歩くこと二十分

オークション会場への転移魔方陣があった廃工場の近くにある公園についた

「ほら、出てこいよ」

振り返り、なにもない虚空へと話し掛ける

するとなにもないはずの空間が捻れて数十人の敵意剥き出しな奴等が現れた

「つと、予想以上に多いな」

多くて十人前後だと思ってたがまさかこれほどの数とはな

軽く五十は居るぞ

そんなやつらが無言で武器を構えてくる

「はあ……どうせオーフィスの手下達だろうけど、良いぜ、相手に
なるからまとめて来な」

その言葉と同時に一斉に襲ってくる

「いざ——踊るぜ開戦だああアアッ!!」

一誠side

戦いが終わり、朱乃さんの一言のせいで俺が女性陣からの殺気を向
けられたのでさっさと帰ろうとした時

ドゴンッ!

突如として廃工場を揺らすほどの激しい轟音が外から聞こえてきた
なんだと思って俺達は警戒しながらも外に出てみる

すると——

「まったく、全員が変な力使いやがって……意外に手間取ったじゃね

えか」

そこにはうめき声を上げて山積みになされてる人間の上で悪態を吐く兄貴が居た

って、兄貴の下に山積みになされてる人間って禍の団の連中か!?

それを証明するかのように地面に現れた魔方陣で山積みになされていた人間は全員、どこかに消えてしまった

「お、一誠たちじゃないか」

ようやく気付いたらしく手を振って近づいてくる兄貴

「ちょっと旅人、貴方はなにやってたのよ?」

「喧嘩」

うん、実にわかりやすいですね

「……そんな優しいものじゃないです」

ゲシゲシと兄貴の脛を蹴る子猫ちゃん

「怪我するから喧嘩は良くないよ、兄さん」

「そうです、怪我でもしたらどうするんですか!」

ゼノヴィア、アーシア……普通は怪我で済まないレベルの戦いだっ
たと思うんだけど?

「ふふふ、まあ旅人君らしくて良いじゃないですか」

朱乃さんまで……

「まあ……良つか」

兄貴だしな、心配するだけ無駄なんだろう

弟して微妙な気持ちになる夜であった

S i d e o u t

「で、あいつらは揃いも揃って浮気調査しに行ってる」と

「ああ、彼女たちにとっては重要な問題だからね」

廃工場での戦いから一晩、俺とゼノヴィアは家で療養していた

いやね、俺としてはなんともないんだがゼノヴィアが怖い顔で療養しなきゃだめって言ってきたんだよ

だからと言ったらおかしいがゼノヴィアに膝枕してもらってのんびりしている

「しかしモテる男は大変だねえ」

「ふふふ、まったくだ」

あいつ鈍感だからリアス達も苦勞するだろうな

「お前は行かなくて良かったのか、ゼノヴィア？」

こいつも一誠のこと好きなんじゃないのか？

「私は良いさ、確かにイッセーは素晴らしいけども私は兄さんのことが好きだよ」

「……………はい？」

なん……………だと？

「それはlikeか？」

「いや、loveの方だよ」

優しい笑みをしながら愛しそうに俺の頭を撫でてくる

「私は兵藤旅人という一人の人間の男を異性として愛している。兄さんが私以外の好きな人が居たとしても関係はない、私は貴方の中で2番目で居れば良い……………だけど私の中で貴方はいつも一番に居ることは絶対に変わらないし変えない。だから貴方の正室でなくとも良い、せめて愛人としても貴方の傍に居続けたいんだ」

……………ちくしょう、そんな言われると照れるじゃねえか

「もしもだ、もしもだが仮に俺がお前の恋人になったとしよう。俺は旅人だ、自由気ままに生きていくぞ……………それでも良いのか？」

「構わない」

即答するゼノヴィア

「私は自由気ままな兄さんに惚れたんだ」

「それに俺は旅をするためにリアスや一誠の傍から離れるんだぞ？」

「くどいよ」

少しだけ怒ったような口調で言う

「私が愛しているのは世界を自由に飛び回る一人の旅人、その旅先が地獄だろうが天国だろうがどのような場所だろうと着いていく。だから安心してほしい」

そつと額に口づけされる

「……そう簡単に俺の背中を守れないぜ」

「ならば守れるようになれば良い話さ」

ははは……こりゃあ完敗だな

「なら、頑張らないとな」

「ああ、もちろんさ」

静かに、でも情熱的に熱いキスを交わしたとある昼下がりの話しである。

「……なにしてんの？」

「「ッ!？」」

毛布を引きずって眠そうに目を擦りながらキーアがリビングの入口あたりから話しかけてきた

「よ、よお！　目が覚めたのか！」

そうだった、キーアはお昼寝してたんだっとな

「ねえねえ、二人で何してたの？」

「ははは、兄さんが眠そうにしていたから私が膝枕してあげてたんだよ」

ナイスフォローだ、ゼノヴィア

「旅人もお昼寝してたの？」

「そうだぞ、今起きたけどな」

どうやら誤魔化せたみたいだな

「えへへ、じゃあキーアと一緒にだね」

抱きついてくるキーア

「キーア、私と一緒にご飯を食べないか？」

「うん！ キーア、お腹ペコペコだよ!!」

そのままじゃれあいだす二人

本当の姉妹みたいだな

その光景を見て和みながら俺は昼食を作るために台所へと向かうのであった。

とある昼下がりにて（後書き）

今回のお話ではゼノヴィアにスポットを当てました。

てかむしろヒロイン候補として輝かせてあげたかったw

ハーレム目指すか？ 否か？

悩んでいる自分です。

そんなところも感想でなにかしらご意見を戴けたりしたら嬉しいですね。

あ、あとですけども旅人の防御力や戦闘能力、パラメーターについてはのちのちですが本編で語りたいと思います。

一応は気づかれないような伏線なども張っているんですけども、そのせいで納得のいかない方もいらっしゃるでしょうです。

だけでもそんな感想也大歓迎です！

むしろ戦闘描写や日常風景で違和感を感じたところがありましたらじゃんじゃん仰ってくださいまし。

では、長くなりましたのでここら辺で！！

オーデイン（前書き）

さてと、どうするよ？

このままじゃ数話で7巻を終わらせちゃうぜ？

オーデイン

「ただいまー」

ご飯を食べ終えてしばらくして一誠達が帰ってきた

「おかえり」

俺はゼノヴィアとキアの三人でお茶を飲みながら玄関へと声をかける

「お客さん連れてきたから兄貴」

「客？ 友達か？」

誰だと思い、俺は廊下へと顔を出す

瞬間、俺の眼前に剣の刃が――――

「うおおい！？」

紙一重でそれを避ける

斬られた髪がヒラヒラと宙を舞う

さらに俺に迫撃を仕掛けるべく迫る刃

しかし今度は

「――ハッ！」

パシッと真剣白羽取りを決める

「……お久しぶりですね」

「お、お前は！」

以前と違い、なにやらスーツを着ているがこの姉ちゃんには見覚えがある

「北欧での一戦以来か、ヴァルキリー！」

しかもあの中でも特にしぶといやつだったはず

再開の挨拶は済んだのか剣を収めるヴァルキリー

「あんたが居るってことは爺さんも居るのか？」

「ええ、ちゃんと私の後ろに」

「久しいのう、童」

「爺さんも変わりなさそうでなによりだ」

数ヶ月振りの対面

以前にも感じたことだがこの爺さん、やはり人間じゃねえ

だがリアス達みたいな悪魔でも、アザゼルみたいな堕天使でもない
強いてい言うならイリナみたいな天使に近いが明らかに違う

「爺さん……あの時の飲み屋ではちゃんと答えてもらえなかったが
あんた何者だい？」

ここにいる誰よりも、もっとうとう……表現しにくいが高位な存在に
感じ受けられる

「ふおふおふお、今のお主になら教えても良いじやろう」

こほんと咳払いをする爺さん

「改めて名乗るがワシの名はオーディン、北欧の主神じや」

「オーディン、北欧の主神……ってことはあの百発百中の槍とも名
高いグングニルのオーディンだったのか？」

いやはや、まさかまさ

神様ってマジで居たんだな

「なんじゃ、ワシのこと知っておるのか」

「知ってるもなにも、有名すぎる名だろうが」

「ふおふおふお、嬉しい限りじや」

心底嬉しそうに笑う爺さん。

「まったく、まあ良いか。ようこそ兵藤家へ」

とりあえずはなんか飲み物でも用意しなきゃ。

翌日、俺はバイトを終えて帰ってくると地下の訓練所に来ていた

「おうおう、やってるねえ」

そこでは一誠と木場がなかなか熱い戦いをしていた

ギヤスは少し離れたところで時計係りらしい

「よおギヤス、お疲れさん」

「お義兄さん、お帰りなさいです」

「ただいま」

ギヤスの隣に座って俺は一緒に観戦をする

「これお土産ね」

帰りに商店街で買ってきた果物を渡す

「いやゝ、頑張るねあの二人も」

「はい、でもイッセーさんの方が少し押され気味です」

「そうだな、じゃあなんで押され気味なんだろう？」

「え？ え〜と……」

俯いて考えるギヤス

少しすると顔を上げた

「直線的な移動が多いからですか？」

「正解」

頭を撫でてやる

「一誠のあの変な鎧の加速を使えば瞬間的な速度は木場に引けをとらない、だが動きが直線的なせいであまり攻撃が当たらずにいる。一方の木場は速さで勝っているも一誠の一撃に警戒して容易に斬り込めずにいる。一進一退の良い勝負だ」

「へえ〜……つとそろそろ時間だ」

「時間です！」と大きな声で叫ぶギヤス

さてと、俺もそろそろ戻りますかね。

「……………」

「……………」

五階、VIPルームで俺は爺さんと向かい合っ

「改めてだが、久しぶりだな」

「うむ、久しぶりじゃ」

俺は用意した特上の日本酒を酌してやる

「以前会った時は神様だとは思わなかったぜ」

「それはこちらの台詞じゃ、お主こそただの人間だと思っておったわい」

「俺はただの人間だぞ？」

「抜かせ、ただの人間がグレードレッドと引き分けられるものか」

まあ……それもそうか

人間がドラゴンとタイマンするなんて自殺行為みたいなものだしな

「なあ、爺さん」

「なんじゃ？」

「北欧の主神ともあろうあんたがこの極東の地に来て、何をするつもりだ」

俺は注がれた酒を飲みながら問う

すると爺さんは髭を撫でながら愉快そうに笑い

「今を背負う若者達への道を開きに……かの」

「……………へえ」

一体なにをするつもりかは分からんが、爺さんは言っでは悪いが一世代前の人

ならば自分がやれることは今を背負う若者へ道を示すこと

「ふふふ、なんだ爺さん。あんたもまだまだ現役やれるんじゃないか？」

「ふおおおおお、所詮はワシは一昔前の住人よ。今のことは今の者にやらせねばならん」

「そうだな、その通りだ」

俺達は酒を飲みながら世間話に花を咲かせるのであった。

オーディン（後書き）

旅人とオーディンは歳の離れまくった友人的な関係です

ちなみにですが、旅人はグレードレッドやオフィスの強さの位を知りません

邂逅〜前篇〜（前書き）

どうもどうもアザトクです

来ましたよ皆さん！

念願のハイスクールD×Dの10巻が発売されました！！

既に購入したのでこれが投稿し終わったら、鑑賞タイムです。

みんなも本屋さんにGO！

邂逅く前篇く

爺さんと話した翌日

俺は朝から散歩に出掛けていた

決してイッセー達が爺さんとかと出掛けてたり、キーアがお袋と親父と一緒に遊びに行ってて暇だった訳ではない

もう一度言うが暇だった訳ではない

「……またかよ」

うんざりする

この前に続き、また尾けられているみたいだ
でも前みたいには行かないぞ

今日は一日、だらけるつもりなんだ

「……玉神さんと将棋でもしに行くか」

そう思い、玉神さんの自宅の方へと向かう

何度かお邪魔したことがあるが、かなり広い日本風の屋敷だ
ちゃんと日本庭園もあるしな

お土産に煎餅か何かでも買っていくか

だが世界はどうやら俺が嫌いみたいだ

「残念ですが、それはまた今度にさせていただきたい」

そんな声が聴こえたと思ったら周辺の気配がガラリと変わった

「お初にお目に掛かる、兵藤旅人」

目の前に現れたのは半端ない気配が漂う槍を持つ男

「お前は誰だ！」

とりあえずノリで叫んでみた

男はフツと笑って答えた

「俺の名は曹操、禍の団の英雄派の一人だよ」

「曹操……三国志のか？」

「そうだ。だがまあ、三国志のは初代だよ」

つまりこいつはその曹操の末裔と考えて良いのか？

「でだ、要件はなんだよ？」

「単刀直入に言おう、仲間になれ」

「断固拒否する」

なんなのさ、一体

最近、俺は仲間ならなかった誘われすぎるぞ

「それは残念だ」

全然残念そうじゃない顔で言われてもねえ

「では、代わりに一手ご教授願いたい」

「は？」

意味が解らん

だが曹操は俺の同意を求めずに俺の懐に入って槍を突き出してきた。

遅いな

俺は身体を捻ってその一突を躲して、最小限の動きで曹操の後ろに
回る

「一手ご教授って、戦闘技術で良いのか？」

「っ！？」

声に驚いたのか急いで飛び退く曹操

「……そうだ」

いやいや、なに驚いてんのさ？

「手始めにだが、今なにをした？」

「体を捻って攻撃を躲して、そのまま背後に回った」

今ので俺が攻撃しようと思えば十回は殺せたな

「まあ、良いさ。暇だったしそれぐらいはある程度つけてやるよ」

「感謝すr」

一瞬の緊張の緩み

その瞬間に俺は曹操の顔前に拳を持ってくる

「まず一つ目、隙だらけ」

慌てて曹操は槍を払うように振ってくるが

「その二、遅い」

足を払ってバランスを崩させる

「その三、反応が鈍い」

蹴るのではなく、あえて大外狩りで倒す

倒れるや否や、ゴロゴロと転がって俺から距離を取る曹操

「今ので確実に三回は殺せたな」

「舐めるなっ！」

槍を構えると瞬時に攻めに出てきた

「その四、直線的ではないが動きが読みやすい」

だから俺はその動きに合わせてラリアットをかます

倒れたところに顔の横の地面を踏みつける

「今ので五回は死ねたな」

その後も俺は曹操を相手する。

当然だが、俺は曹操に触れられてもいない

「はあはあはあ……」

「約三十分、計351回の死亡だ」

もうすでに槍を支えに立つことすら敵わなくなっている曹操

途中で『禁手』とか言う技を使いそうになったが、俺がそんな隙を
与えるとでも？

当然ボコボコにしてやりましたぜ。

「ま、だ……まだ」

それでも立ち上がろうとする曹操

「はぁ、もういい加減にしと——」

俺が呆れて溜息をつこうとした瞬間のことだった

この街の空に“何か”がやって来た。

「おい曹操、悪いがマジでもうお開きだ」

「……なぜだ」

「わからないか、この気配を」

そう言うと、曹操は納得した風な顔をした

「理解した、だがこの結界を解くことはできん」

「……………」

そう言われるのはわかっていたさ。

「なら壊すから安心しろ」

俺は重いきり地面を殴った。

すると————

パリンとガラスが割れた時のような音と共に、結界が壊れた。

「なん……だど？」

驚愕する曹操

「悪いが、この程度の結界なんか俺には意味がない」

もつと強力な結界を味わったことがあるからな

そんなことよりもだ

俺はここら辺で一番高いビルの屋上へと外壁を跳んで上る

屋上から空を見ると、大きな狼が赤い鎧を着たボロボロの男にトドメを刺そうとしていた瞬間だった

ふざけるなよ、ワンコロが――――

邂逅く前篇く(後書き)

曹操の扱いが酷かったな。

これはあえてこうしたので、怒らないでください

感想をお待ちしております

邂逅く後篇く（前書き）

どうも、お久しぶりです

今回はバトルは無いかもです、期待してくださっていた方々には申し訳ありませんでした。

では、本編にどうぞ

邂逅（後篇）

戦闘現場 side

イツセーは眼前へと迫るフェンリルの牙を見ていた。

周りの仲間も必死に助けようとはするが間に合わない

誰もがイツセーの死を覚悟した瞬間

「――――ッ!？」

フェンリルはわずかあと数センチで牙が刺さるところで凄まじい勢いで飛び退いた

「なにをしているフェンリル!!」

ロキが叫ぶが、フェンリルは唸り声を上げて下の方を睨むだけだった

その隙にイツセーはアーシアに回復してもらい、回復が終わるとフェンリルへと視線を向ける。

その場に居た全員の視線がフェンリルへと集まる。

そして全員が一つの事に気が付いた

フェンリルはこの場の誰も既に意識に止めていなかった。

まるで“もつと強大な脅威”があるかのように。

自然とフェンリルの視線の先へと全員の視線が向く

視線の先はこの街で一番高いビルの屋上

そこに一人の少年が立っていた。

「……………お兄さん？」

アーシアが不思議そうな顔で旅人を見て呟く

なにをやっているのだ、誰もがそう思っただろう

瞬間――

ストン

オーデインが乗っていた馬車の上に旅人がいつの間にか立っていた。

そして――

ドゴンツ！

イッサーたちとロキの丁度中間あたりから轟音がしたのだった。

side out

おいおい、なんだよその犬は？

俺は思わず心の中で呆れてしまった

神だと言う爺さんや、それと近いオーラを感じる男

さらにはなぜかここに居るリアス達

その誰よりも目の前の犬は強靱なオーラを纏っていた

「貴様、何者だ」

男がなにか言ってくるが俺に返事をする暇はなかった

「……………」

「……………」

睨みあう俺と犬

グレードレッドとはまた違う強者

あいつよりは弱いのだろうけども人間の俺にとってはグレードレッドと大差ない脅威だ

感覚を研ぎ澄ませ、気を弛めるな

グレードレッド以来の強者だ

「……………ッ！」

互いに同時に仕掛けようと動きだす

しかし

「……………萎えた」

同じことを考えていたのか犬も動きを止めた

「この感覚、ヴァーリだったか？」

身体がダルくなる感覚

過去に数度味わってきたから間違いがない

「お楽しみを邪魔してすまない」

「別に、構わねえよ」

俺はヴァーリに見向きもせずそう答える

「じゃあ、俺ってば帰るから誰か降ろして」

流石にこの高さから落ちたら骨折するかもしれない。

「お詫びではないが俺が下まで送り届けよう」

お言葉に甘えて俺はヴァーリに手伝ってもらって地上に降りた。

はあ、さっさと帰るべ。

邂逅〜後篇〜（後書き）

次回、お姉さん登場

黒歌、推参（前書き）

おんやあ？

考えてみれば原作キャラのほとんどが空気になってる気がするぞお？

黒歌、推参

俺は自宅に帰ってからずっとあの狼について考えていた。

間違いなく、奴は強い

それこそ爺さんや狼の少し後ろにいた男なんかよりも断然

纏う雰囲気からして一誠たちの遙か上のステージに立っているもののソレ

遙か高みにある一線を越えたさきの者だけが纏うことの許されるあのオーラ

「ははは、なんだよ。やっぱり世界にはまだ強いやつが沢山いるじゃないか」

別に俺は戦闘狂ではない、喧嘩は好きだけでも自ら進んでやる気にはならん。

でもさ、なんかこう……自分と同じかそれ以上の敵に出会ったら戦いたくないか？

勝って、自分の強さを世界に証明したくなる。

「はあ、やっぱり俺は戦闘狂なのかな？」

違うと思いたい

「ただいま」

「おう、お帰り」

どうやら一誠たちも帰って来たようだな

俺は出迎えようと玄関に向かおうとすると

「にゃーお」

何故カリビングの入り口に居た黒猫と目があつた

「は、ははは」

乾いた笑いと滝のような汗が流れだす

「な、なんで、ここにあなたがいらっしゃるのでしょうか？」

「にゃあああ」

深く唸るような声

そして猫は俺に目掛けて跳躍してきた

「逃げ――――」

「逃がすかあああああああああああああああああああああ
あ！！」

「ごふたうhあl s kんさc;l k c m;あs*!？」

俺の鳩尾に変化した黒歌の頭突きがクリティカルヒットしたのだった。

「ぐおお」

痛みでのたうちまわっていると黒歌が静かに近寄ってきて俺のマウントポジションを取ってきた。

「旅人、この前のこと覚えてるかにゃ？」

「え、えーと……あのオークシユンでのことでしょうか？」

「そうだにゃ」

ニコニコといい笑顔の黒歌

「なんであそこで私を気絶させたかにゃ？」

「い、いやー、そのですね」

なんでってそりゃあ

「ついカッとなってや」「反省してても許さないにゃ」「ぎゃあああああああああああ!?!」

仙術で俺の身体に電撃があああああああああああ!？

「ちょ、これはマジやばいっすよ黒歌さん!?!」

「知らないにゃん」

「いいいいいいいいいやあああああああああああああああああああ
あああああああ!!」

その後、ヴァーリ達に止められるまでこの拷問は続いていた。

「……………死ぬかと思った」

まだビリビリしてるし、辛いわゝ

「旅人がいけないにゃん」

痺れて動きにくい俺をギュッと抱きしめて笑顔で言う黒歌

ははは、頭の両サイドが柔らかいものに挟まれてここはまさに――

――

「アザゼル」

「なんだよ?」

「ここはもしかしたら、天界だったのかもしれない」

「早まるな、確かにそこは桃源郷かもしれんが今のお前は電撃の喰らいすぎで死にかけているだけだ!!」

ふっ、アザゼルよ……なにを言っているのやら。

「アザゼル」

「今度はどうした？」

さあ、いまこそ万感の思いを込めて言おう

「よし、では挟まれようか。俺は今日この場を死地と断定するッ！
揉んでも怒るなよ、黒歌ッ！」

「私はこのままシッポリとにゃんにゃんしてもかまわないにゃ」

なん……だと！？

「させないぞ」

俺は黒歌の言葉に反応して、黒歌をお持ち帰りしようとしたら俺の上にゼノヴィアが乗ってきた。

「残念ながら、そう簡単には兄さんを譲れないな」

「へえ……あんた、誰よ？」

なぜだろうか、一気に周りの温度が下がって行く

「旅人」

「兄さん」

「な、なんでしょうか？」

なぜだろうか、さっきよりも全身から流れ落ちる汗が半端ない

「「ちよつと、部屋を移そう」」

「断固拒否すr」

俺が言い終わる前に、俺の意識はブラックアウトした。

その日、旅人の部屋から聞こえてくる悲鳴を聞いてイッセーとアザゼルは静かに旅人の部屋の前に一輪の花を添えたという。

黒歌、推参（後書き）

どうしようか、魔槌フラグ忘れてたWW

ミドガルズオルム（前書き）

お久しぶりです

サブタイを考えるのに苦労する今日この頃

第何話とか簡単なものにしておけばよかったのではと考えずにはいられません。

まあ、とりあえずは本編にどうぞ！

ミッドガルズオルム

朝、目が覚めると俺は簀巻きにされていた

「……身体中が痛いなり」

昨日は大変だった

斬激やら電撃やらでO・H A・N A・S Iされたのだ

確かにオークションでのことは悪かったさ

でもそこまでやる必要はあったのか聞きたいね

「と、とにかく、逃げよう」

「どこへにゃ？」

……体中から流れ出る冷や汗がとまらない

「ふふふ、逃がさないにゃ」

ぎゅっと俺は抱きつかれる

「ささ、リビングに皆いるから一緒に行こう」

有無を言わずに俺は黒歌に連行させられる、助けてくれ

リビングに着くとなにやら空中にどこかで見たことのある蛇が居た。

「……ああ、深海にいたあいつか」

『ん？ ああ、久しぶりだね』

俺に気づいたらしく、その龍はこちらに目を向けた

「よっ、みっちゃん！」

『やあ、たーちゃん』

相変わらず、ボケっとした感じの声だな

「元氣してた？」

『ずっと眠ってるよ』

「ははは、相変わらずだな」

いやはや、しかしなんでここにみっちゃんが？

そう思って誰かに聞こうと周りを見渡すと、なぜかみんなポカンとした表情でこっちを見てきた。

「お、おい、兵藤旅人」

ヴァーリが俺に話しかけてくる

「どうした？」

「貴様、なぜミドガルズオルムと仲親し気なのだ？」

なぜって……なあ？

「昔、俺はとある秘密研究所の実験で深海にまで行ったことがあったな」

その組織はなんでも深海にある、なにかを手に入れるために長年調査を行なっていたらしい

「俺は当時、その研究所のアルバイトで調査団の一員となった。アルバイトの報酬は確かに良かったが、俺にとっては深海に行けることに意味があったんだ……深海で俺達を乗せた潜水艇は故障をしてしまい、俺以外の調査員は全員が研究所の研究士、俺を置いて先に小型の潜水艦で逃げ出した」

流石に俺もその時は命の危機を感じたね

深海数千メートルのところでエンジンが停止してしまった潜水艦に閉じ込められたんだから

「外に出て修理しようも外は水圧が凄まじい、まさに絶対絶命！

……そんな時だった」

とりあえず内部からの修理を試みた結果、ライトだけはつくようになった。

そしてライトが照らした先に居たのが

『僕だったんだよね』

「いやはや、あの時は助かったぜ」

はっはっはっ！

と笑い合う俺達

そして何故かみんなは呆れていた

「もうあれね」

「ええ……流石は旅人君ということかしら？」

「むむむ、私と合う前にそんなことが」

上から順にリアス、朱乃、黒歌

てか朱乃、なんだよその言い方は？

「兄さんがハチャメチャすぎるんだ」

「そうです、お兄さんがいけないんです」

「少しは自重してほしい」

ゼノヴィア、アーシア、子猫からも批判が凄い

とりあえず女性陣に味方はいないらしい

「兄貴、ごめん」

「流石に僕もフォローの仕方がわからないよ」

「これは流石にお前が悪い」

「えとえと……とりあえず自重してください！」

駄目だ、男性陣にすらも味方が居ない

なんだいなんだい、俺がみっちゃんと知り合いだっただけでなんで
こうも言われなきゃいけないんだ。

若干いじけていると、みっちゃんが話し掛けてきた

『ははは、相変わらずみたいで安心したよ………ところで
ーちゃん、《壁》は越えられたかい？』

「………いいや、なかなか難しいな」

俺は先ほどまでと違い、真剣になる

「何度も何度も、悔しい思いをしているさ」

『ふふふ……それでも諦めないのかい？』

「ああ……俺もまだまだ若造なんだ、世界を甘く見るのも絶望する
のも早いだろう？」

『やはり君“達”は面白い、あの虚構の街で壁にぶち当たっても諦
めずに前に進もうなんて普通は思えないよ』

心底、愉快そうに笑うミドガルズオルム

『僕はこの深海で世界の終末まで眠るつもりだ……でもね、君達の物語には期待しているんだよ』

「……………」

『悩み、苦しみ、もがき続けなよ少年、その壁はただでさえ固く大きいんだ。必死にならなきゃ壁に傷すらいれられないよ』

「ふふふ、肝に命じておくよ」

そこまで言うともミドガルズオルムは大きな口を開けて欠伸をした

『さて、そろそろ僕は眠るね。今日は色々楽しかった、またいつか会おうね旅人』

「おう、またいつかな」

通信が切れ、ミドガルズオルムの姿が消える

俺はしばらくの間、その虚空を見つめた

「……………またいつか、か」

その時、俺はどうなっているのだろうか

「……飯でも食うかな」

柄でもないことを考えちゃった

「あ、旅人おはよー！」

そう考えているとキーアがリビングにやってきた

「おはようキーア」

「もう、起きるの遅いよー」

違うんだ、昨日の夜は黒歌とゼノヴィアが（暴力的な意味で）寝させてくれなかったんだよ

「キーア、お腹がペコペコだよ」

「丁度良い、なにか食べに行くか」

「うん！」

よしよし、食いに行くか

俺はキーアと手を繋いでリビングに背を向ける

「離せ木場！！」

「気持ちわかるけど駄目だよ、これからロキの対策をしなきゃいけないんだから」

「それでも、それでも私は行かなければならないんだあああああああああ！！」

「美候、アンタまでなににするにゃ！」

「いやいや、こっちもスイッチ姫たちと一緒に打ち合わせだから」

「くっ、こうなったら仙術で——ヴァーリ、なんで籠手の力を使うにゃ!？」

「……とりあえず落ち着かんか」

なんか後ろで色々と繰り広げられている気がするけど俺は気にしません。

「ねえねえ旅人」

「どうした、キーア？」

キーアは俺に満面の笑みで聞いてくる。

「なんか賑やかでみんな家族みたいだね！」

「……………ああ、そうだな」

家族……………か。

それでもこいつら敵対しているどうしなんだけどな。

でも、そんなのもありかな？

「そうだな、そんな道もあるのかもしれないな」

「旅人？」

「おっと、なんでもないよ。それよりはやく食べに行こう」

「うん！」

ドアを開けて外へ出る。

ああ、太陽が眩しいぜ。

ミドガルズオルム（後書き）

ワンちゃんをどうするか悩むぜ。

とにかく、それは今後考えよう。

感想をお待ちしております

日曜大工（前書き）

だから、サブタイが思いつかないんですよおおおおおおおお
おおおおお！！！！

日曜大工

翌日の朝、俺は庭で日曜大工をしていた。

いや、今日は平日なんだけどね。

なんかリアスたちはロキがうんちやらかんちやらとか言って学園に行くのをサボった。

でもあいつらの姿を模した使い魔？ に代わりに出席させているらしくて問題はないらしい。

「旅人、トンカチ持ってきたよ」

「ありがとうな、キアア」

俺はキアアの頭を撫でる。

ちなみに黒歌も居るが、黒歌はちよつと離れた芝生の上でお昼寝中だ。

はっ！ 見るな、アレは俺の胸だ！！

しかし、それはともかくとしてなんだろうなこのトンカチ

すごく豪華な装飾と凝った模様とかが彫ってあるんだけど？

この場合は刻まれている？

まあ、どっちでもいいや、使えば。

「ところで何作ってるの？」

「うーん？ ナイシヨ」

釘を打ちつけながら俺はキアにそう答える

「えー！」

「ははは、いずれわかるさ」

しかしこのままだとずいぶん大きくなるぞ？

どうでも良いけど。

それにしても、平和だなあ……

「キアもなにか手伝う？」

「じゃあ俺の代わりに黒歌の胸を揉んできて」

「わかった！」

え（・・ω・・）？

「にゃあああああああああああああああああああああ
！？」

……とりあえず、俺が電を喰らったことをここに記しておく。

作業も一段落したので休憩の為に芝生に寝転がる。

「まったく、なに子供にやらせるかにゃ」

「……反省もしてる、後悔もしている」

だってこんなにも体が痛いんだもの。

俺だって冗談で言ったつもりだったんだよ？

「この子は純粋なんだから、そういうことは駄目にゃ」

「ふぁーい」

ちなみに俺は黒歌の隣に寝ている。

正確にはキアを俺と黒歌の真ん中に挟んで川の字に寝ている。

キアは既に熟睡しているようだ。

「……なんかこうしているのも懐かしいな」

「……まったくにゃ」

あの頃はよくこうしていたな。

「半年ぐらい前までこうしているのが私の日々であり、全てだったにゃ」

「ふふふ、俺も同じだ」

でもお互いにあの唐突な別れから全く違う道を歩み始めた。

「不思議なものにゃ。仕方がないとはいえ、別々の道を歩み始めたはずなのにこうして今は昔の様に空を見上げて一緒に日向ぼっこをしている」

そうだな、考えてみると不思議なものだ。

「……なあ、黒歌」

「なににゃ？」

俺はこの半年間、思っていたことを聞いてみる。

「あの時の別れ……お前は怒っているのか？」

「当たり前にゃ」

うう、やっぱりそうだよなあ。

「でもにゃ、旅人」

黒歌は空を見上げつつ伸びをしながら言ってくる。

「私は今になって思うにゃ、あの別れはきっと私や旅人にとって最良の出来事なんだって」

「へ?」

「昔、旅人が言ってたにゃ、『なにごともし起きた時は最悪だと思っても、後々振り返ってみるとそれは最良の出来事なのかもしれない』って」

世界はいつも残酷であり、優しい

その時は苦しく、辛く、悲しくても、後々に振り返るとその出来事は自分にとってなくてはならなかった出来事だったのかもしれない。

だから諦めずに前に進んで行かなければならない。

その出来事が自分をより輝かせるためだと信じて。

「私はそのおかげで禍の団に入ってヴァーリたちに出会ったにゃ。そりゃあ、あの頃が楽しすぎたから霞んで見えたけど、今ではとても面白い場所にゃ」

「ふふふ、それは良かった」

「旅人は旅人で新たに《壁》に立ち向かおうとしている……………なんだかなんと言って、全て良い方に流れてるにゃ」

「……………ああ、そうだよな」

「だから旅人、貴方はいつまでもそのまま進んで行って。私もあな

たのそばで一緒に進んであげるから」

ギュッと抱きついてくる黒歌、俺も黒歌に抱きつく

そしてそのまま俺達は自然にキスをした。

「むぐぐぐぐぐー!!」

「「あっ」」

俺らが抱き合ってキスをしたせいでキーアが苦しい思いをしている
ようだ、主に黒歌の胸に挟まれて。

慌てて離れる俺達。

「ふはあ！ もう黒歌、私死ぬかと思っちゃったよ!!」

「う、ごめんにゃ」

苦笑いしながら謝る黒歌

ははは、じゃあ俺はそろそろ日曜大工に戻りますか。

日曜大工（後書き）

ちなみに皆さんも理解されているかと思いますがキーアが持つてきたあのトンカチ

はい、その通りだと思います。

ピンと来ていない方は、次回をお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0154r/>

旅人なる赤龍帝の兄

2011年10月9日07時36分発行